
Colorfules

緒例

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Colorful es

【Nコード】

N6133E

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

小さな町の小さな病院を営む須藤家。現在両親はアメリカに渡り長男の青悟が主治医代理になっている。そんな須藤家は六人兄弟としても有名。しかし、そんなある日、彼等を標的にする組織の存在がちらつき始めて・・・

第一話：須藤病院

小さな町にある小さな病院。

その主治医は現在アメリカに渡り研究中。

そしてその主治医には息子が五人と愛娘が一人いた。

この物語は六人兄弟が巻き起こしたくて巻き起こすのではない、むしろ元凶はその主治医の性で巻き込まれるトラブルアクションストーリーである。

「どこも悪くはないと思うのですが、
少しだけ疲れが見えますね。

薬を調合しておきますから飲んでみてください」

若き医者は女性受けする笑みを浮かべた。

須藤青悟、二十三歳。須藤病院の跡取り息子で医者。

高校の時に親の勧めでアメリカに留学。

そして飛び級で二十歳にして医学部卒業。

さらには論文まで認められたという医学界の新星ではあるが、

当人は地位だ名誉だと興味もないので、

自分の家でオペさえ出来ればよいと日本に戻ったのである。

しかし、もう一つ理由はあるがそれは後日語るとしよう。

「須藤先生、次の患者さんが待たれてますよ」

薬剤師を目指す次男坊がこれまた女性を虜にする笑みを浮かべて

診察室に入って来た。

須藤紅輝。須藤兄弟の中でもっとも参謀長官に適した青年である。
ただいま大学二年生、今日は休みである。

「ああ、分かった。それではお大事に」

「ええ、またお願いするわ」

女は自分にとって最大の武器である色気をプンプンさせるが、女の体を見慣れてる医者には無駄であった。

その様子を面白おかしく紅輝は見ているのである。

そして次の患者のカルテを机の上に置きながら紅輝はわらった。

「女性の患者が増えているのはいいが、

あまりいい気はしないかもな」

「まあな、疲労からくる病気ならまだ治しようもあるが、体がだるいだけでは処置も限られてくるしな」

いたって真面目な長男は、

まさか自分目当てで女性の患者が増えているなんて思ってもいない。

現代人特有の疲労で病院に来ているのだと思っている。

「そっちじゃないさ、

女性の患者が増えると未来のうちの看護師に愛想尽かされるぞ」

それをきいて黙る長男はやはり純粹なんだろう。

紅輝はニツと笑って、

「じゃ、次の診察よろしく」

そう言い残して診察室を後にした。

第二話：弟達

「さて、今日は野菜が特売か・・・」

スーパーのチラシとにらめっこする高校二年生の男子も珍しいだろう。

家にある巨大冷蔵庫の中身と相談しながら献立を考える。
須藤水稀、須藤家三男坊で炊事隊長である。

「おっと、チョコレートも安い！
あいつらのつなぎにしねえと」

下の弟達のおやつも重要と言わんばかりに目を輝かせる。
普段が冷静な分だけ、その様子に驚かされたもの多数だ。

「さて、そうと決まれば早速」

「水稀ちゃん！ 大変だよ！」

「肉屋のおばちゃん」

いつも世話になってる肉屋のおばちゃんは血相変えて走ってきた。

「どうした？ またうちの馬鹿が喧嘩してるのか？」

すぐ下の弟は喧嘩好きで有名である。

「だったら心配しないよ！
彩ちゃんが絡まれてるんだよ！
暴走族の悪ガキどもに！」

それを聞いてマッハで走り出す三男坊。

彩という女に手を出す奴らに命を与えるつもりはない。
それだけ水稀にとって、いや、須藤家にとって大切な人物。

そしてその現場には・・・

「彩ちゃんから手を離せ！」

僕が相手になってやる！」

まだランドセルを背負う十二歳の少年は、
勇敢にも暴走族のリーダーに喧嘩を売ろうとしていた。
それを見て周りのやじ馬達はあわてふためく。
喧嘩を売っているのは須藤碧、五男坊である。

「かわいい顔をしたガキだな！」

その気の奴らに売ったら高く売れそうだな」

「ハッハッハ！ チゲエねえ！」

卑下た笑いがカンに障る。

しかし、それでも碧は大好きな人を助けるために怯みはしない。

「うるさい！ 彩ちゃんから離れろ！」

くっつかかろうとしたとき、
やじ馬達から喝采が上がった。

「碧、お前が出ることはない。
ここは兄ちゃんに任せろ」

絆創膏を頬に貼った少年が碧を制止させた。

「いけえ！ 黄助ちゃん！」

「やっちまえ！ 四男坊！」

須藤黄助、中学三年生のヒーローである。

「あん？ お前が須藤黄助か？」

「そうだ。だが、もう話したくもない」

次の瞬間、リーダーは殴り飛ばされた！

「家の姉貴に手エ出すんじゃねえよ！」

仁王が降臨していた。

第三話：兄弟の権力

須藤家に可愛い長女が帰ってきたのはちょうど黄助がリーダーを殴り飛ばしたときだった。

「紅兄！ 大変だよ！」

「どうした、桃」

小学一年生の桃華の頭をなでなでしながら紅輝は尋ねる。
ちなみに末っ子に激甘な兄達であることは町中が知っている。

「あのね、彩ちゃんが悪者に捕まって碧兄が向かっていっちゃったの！」

泣きながら言う桃華に次男坊はキレた。

「桃、大丈夫だ。兄さんがすぐにそんな奴ら葬り去ってきてやるからさ。」

それと青悟兄さん、家の家計がかかってるんだから、仕事放り出して外に行かないように。

桃、青兄を見張っていてくれよ」

「うん！」

それだけ聞いて次男坊の表情は一気に魔界の王となった。

「たいしたことねえな。中坊相手に勝てない族もさ」

やじ馬達の歓声が上がる。

黄助に敵うものなどそういるものではない。
その辺のチンピラ十人なら一分で片付く。

「黄助兄さんすごいや!」

弟の碧も笑みを浮かべる。
無敵の兄は碧の自慢だ。

「さて、彩ちゃんを兄貴のところへ無事に連れ帰らないと!」

一瞬の油断が命取りになる。
彩の姿がそこになかった。

「彩ちゃん!」

「黄助君!」

声がした方を向くと、拳銃をこめかみに当てられた女性がいた。
須藤家の看護実習生、そして未来の青悟の嫁になるはずの桜井彩
がいた。

ちなみに嫁に来るのは弟達の予定である。

「おっと、動くなよ。俺はその須藤家四男坊に話があるんだ」

明らかに暴力団関係者だった。
それも須藤家を狙う……

「俺にはねえよ。そういう関係のことは兄貴か親父に言ってくれ。
まだ未成年にそっち系の脅迫されても困るんだ」

もったもなこなだけにやじ馬達も頷く。

「そうか。だが、このお嬢さんが殺されたらどうする?」

「決まってるだろ? 家の兄貴達がお前達の骨すら残さない」

そう言い終わった直後、男は意識を失い倒れる。

そして黄助は罰の悪そうな表情を浮かべた。

「水稀君!」

キラキラした穏やかな茶色い瞳が水稀を映した。

「彩ちゃん、無事でなにより。」

それと黄助! お前がいながら何失態犯してるんだ!

もし彩ちゃんの身に何かあったらお前の存在消されるぞ!」

「悪かったよ、そう怒らないでくれよ」

黄助は耳を塞ぎながら水稀に謝る。

喧嘩でも権力でも上の兄には敵わないのが須藤家だ。

「とにかく、後は紅兄さんに頼むからな」

そして現れた次男坊。気温はマイナスになった。

第四話：嵐の前

須藤家家訓。

「須藤家に喧嘩を売るやつに払う礼儀はなし」

「本当にどうもありがとう。」

おかげさまで怪我もせずにすんだわ」

ふんわりした優しい声と穏やかな空気が須藤兄弟を満たす。

彩のこの空気が須藤兄弟の癒しだ。

「何言ってるんだ！ 彩ちゃんは兄貴の嫁さんになるんだろ。」

助けて当然だってんだ！」

勢いよく黄助が言うとき彩は少し頬を紅に染めた。

彩の気持ちは昔から青悟に向いていることは青悟以外皆知っている。

当事者達はいくくについてもおかしくないはずなのに、なぜか見事なまでにこれまで付き合いもなかったのである。

「黄助、彩ちゃんを困らすようなことは言うな。」

それに悪かったな、彩ちゃんを巻き込むようなことになって」

紅輝は丁寧に謝る。

暴走族は偶然に絡まれたにしても、

暴力団関係者は明らかに自分達の家に関わることに。

幼なじみであり、須藤家の看護実習生である彩は当然ターゲットになる。

「紅輝君が謝らないで。

私は皆に感謝してるのよ。

いつだって須藤兄弟は私のヒーローなんだから」

四人の男達は少しばかり照れる。

彩が心からふんわり笑いかけてくれるだけで、嫌なことだって忘れてしまう。

是非とも早く本当の姉になってもらいたいところだった。

「それより、今日は御礼しなくちゃね。

晩御飯は私が作ってあげる」

「本当か!？」

「お願いします、師匠!」

水稀が深々と頭を下げた。

水稀に料理のいろはを教え込んだのは彩である。

「うん、みんなのリクエスト聞いてあげるから遠慮しないで言っ
ね」

「ハヤシオムライス! 卵がとろけてるやつ!」

黄助は誰よりも早くリクエストする。

成長期の少年はいつも腹ぺこだ。

「分かったわ。サラダはグリーンサラダでいいかな?」

「彩ちゃんが作ってくれるならオッケーだよ!」

さあ、早く帰ろうぜ!」

黄助と碧は彩を引っ張りながら家路を急ぐ。

そしてゆっくり歩く紅輝と水稀は少し声を低くして話す。

「紅兄さん、さっきの奴らどう思う？」

水稀の問いに紅輝は少しだけ眉間に皺を寄せ、

「さあな、断定は出来んが親父が何かやらかした気だけはするな」

原因はいつも父親にある・・・

第五話：賑やかな兄弟

「あの～須藤先生？」

青悟目当てで来ている女性患者は不思議そうに尋ねた。

「はい、何でしょう」

声は至って普通。

しかし、その行動は奇怪なものである。

「聴診器って胸に当てるものではないでしょうか……」

答えはもちろんその通りである。

一日の診察が終われば自宅の広いキッチンでコーヒーを飲むのが週間である。

大人数でご飯を食べることが多いため、居間とキッチンは広いのだ。

そしてコーヒーをいれてくれる看護師はニッコリ微笑む。

「青悟君、彩なら大丈夫でしょ。」

紅輝ちゃん達が助けに行ったんだし」

須藤病院の唯一の看護師が彩の母親、桜井七海である。

小さな病院だからこそ出来るわけだ。

それに彩と紅輝がよく働いてくれるため、うまい具合に病院は回転するのである。

「そりゃかってはいますが、

何かとうちの弟達は仕出かすんでね」

「だけど何とかするのが青悟君でしょ」

七海は笑いながら答えた。

苦労性の長男は、なんだかんだ言いながらも問題は解決する。
だからこそ七海は娘の心配もしていないのである。

「・・・本当、母さんの親友だけありますよ。

言葉が巧なところまで似ているんだから」

「あら、お母さんには負ける自信はあるけどね」

七海は苦笑した。

そして玄関は喧騒に包まれる。

「みんなおかえり〜！」

幼い桃華の声が響く。

その声に兄達はすごく癒されてるのは言うまでもない。

「おう！ 青悟兄貴はちゃんと仕事してたか？」

黄助は楽しそうに尋ねると、

やはり桃華は素直に答えた。

「うん！ 聴診器をおでこに当ててた！」

「あっはっはっは！！ またやったのか！！！」

黄助の爆笑に青悟は青筋をたてるがまだここでは出ていかない。

「そう笑ってやるな。」

青兄さんは彩ちゃんが心配で仕方ないんだろ」

「そうだな。桃並の溺愛ぶりだからな」

黄助の二人の兄はそう結論づける。

「けどよ、どんなヤブ医者でも聴診器の使い方ぐらい分かるはず・
・・・」

その日の気温がマイナスに落ちる。

いや、正確に言えば須藤家の気温がだ。

その空気を発する人物は明らかにターゲットを捉えている。

「黄助、一度俺のオペを受けとくか？」

なに、腕には自信があるんで万が一のことがないかぎり失敗はせんが」

黄助はその恐怖に潰されたのである・・・

第六話：嵐の予感

夕食前の須藤家は実に色とりどり。

四男坊以下は学校の宿題に追われ、

三男坊はやがて兄嫁になるはずの彩と夕食の準備。

そして上の二人は何やら話し合っているのだ。

「なるほど、暴力団関係者か。」

明らかに俺達が、いや、父さんの性で俺達がターゲットにされたな」

「全く、いい迷惑だ」

気苦労多い上二人は深い溜息を付いた。

しかし、そんな事も気にせず、

明らかに自分達の父親は研究に没頭しているはずである。

「だけど、おばさんを一人で帰して良かったのか？」

青悟は野菜を綺麗な芸術作品へと変えていく彩に声をかけると、

「大丈夫よ。母は父の面倒を見なくちゃいけないんだし、人質にされるようなタイプでもないでしょ」

ふんわりした雰囲気の中にも強さがある。

彩はニツコリ笑って答えた。

「一応、後から連絡入れてくれるみたいだから、それまでゆっくりしててね、青悟先生」

女神など信じる性質でもないが、彩にはそれがしっくりくる。

女性患者には絶対見せない穏やかな笑みを浮かべ、青悟はコクリと頷いた。

「で、青悟先生、話を戻すが」

二人の気恥ずかしくなる空気を紅輝は遮る。

「その暴力団なんだが、少しだけ気になることがあるんだ。

まあ、黄助が油断してたから確証もないんだけど」

「油断した？」

青悟の視線が四男坊にきつく刺さる。

油断したということは、それだけ彩や碧を危険な目に遭わせたということ。

「兄貴、そう睨むなよ。

皆無事だったし、水稀兄貴が俺のサポートしてくれるんだし」

「言葉を改めろ。お前のは尻拭いって言うんだ。

そんなんじゃないまた赤点とるぞ」

ハヤシライスをじっくりコトコト煮込みながら水稀はつつこむ。

「まあ、話を戻すが、水稀が覇気を仕掛けたときに、

微かだったんだが能力に長けたものが混ざってた気がしたんだ」

「ああ、それは俺も感じた。

ただ、どこにそいつがいたかまでが断定できなかった」

水稀の反省はいつも自分に厳しいものばかり。

だからこそ兄達は何も責めることはしない。

「気にするな、俺だって特定まで至らなかったんだ。

だが兄さん、今回は少しばかり厄介な相手になりそうだな」

・
紅輝の言葉に青悟はこれまでにない大きな何かを感じていた・・・

第六話：嵐の予感（後書き）

大変遅くなりましたが、再開します！

第七話：動き始めた陰謀

「彩ちゃんおかわり！」

「はいはい」

本日の夕食オムハヤシをすでに五杯大盛でおかわりしている黄助。その食欲に底はおそらくあるにはあるがないとしか言えない。

「黄助、そろそろやめとけ。」

兄貴がお前の食費で頭痛めてるの知ってるだろう」

家族六人を養う医者とは病院は黒字でも家計は赤字スレスレという生活を強いられている。

「大丈夫だって！ 兄貴がその気になればもっと稼げるさ！」

「これ以上労働を強いる気か」

間髪入れずに青悟はつつこむ。

「まあ、確かに一理あるな。」

兄さんの写真を一枚千円で売ればかなりの儲けには」

「紅輝、お前のは冗談に聞こえん」

どこか黒いのが次男坊である。

そしてどこから稼いでいるのか、ちゃっかり自分の金銭を確保している。

長男に語らない辺りかなり怪しいが、誰も命が惜しくて聞こうとは思わない・・・

「とにかく、飯を食うなどと言わんが路頭に迷わせることだけはするな」

長男の結論は須藤家の結論である。
異論はほばないように出てくる。

「それと兄貴、一つ聞きたいことがあるんだけどよ」
「何だ？」

改まって言う黄助に青悟はきちんと向き合う。

「今日学校でちらっと見たんだけどさ、
屋上に警察官がいて俺の教室を覗いていた気がしたんだけど、
ただの勘違いなのかな」

「僕も見ただよ。体育の時間に警察官が来てた」
「桃も見ただ！」

下の三人が揃って同じ事を体験する。
普通なら気にすることはなさそうだが、
須藤家の場合はそうはいかない。

「……兄貴、今回の敵は大物だ」

水稀がそう呟いたとき玄関のチャイムが鳴った。
相手は言わなくとも分かる。

「どうする兄さん」

「どうしたい兄貴」

「聞くまでもないよな」

既に臨戦体制の次男坊から下の二人。

彩は碧と桃華を庇う気にいる。

「……とりあえず俺が出る。」

俺はお前達と違って平和を好む一社会人なんですね」

「一番おっかない癖に……」とはあえて言わなかった。

戦闘になるかもしれないというのに、余計な怪我はしたくないのだ。

「俺も付いていこうか？」

紅輝は青悟のカバーをする気満々だが、

「いや、窓ガラスを割って入るかもしれないからな。お前はここにいてくれ」

緊張が走り始めた……

第八話：来るべき時

桃華の視点から見たら、いつも五人の兄達はヒーローだった。そして彩は優しいお姫様だった。だからこそ皆を守ってあげるヒロインに桃華はなりたかった。

「どちら様ですか？」

落ち着いた声で青悟はインターホンに映る警察官に尋ねる。
最近の物騒さを考えれば、夜遅くの訪問者は疑ってしまうものだ。

「警察です。須藤青悟先生はご在宅ですか？」

「私です。何の御用でしょうか」

玄関を開けないですむならそれでいい。

何よりトラブルなどゴメンだ。

桃華の成長に影響は与えたくない。

「そうですか、夜分遅くにすみません。

実は御両親が国際指名手配されましたので、

御両親の行方の手掛かりがないか事情を伺いたく訪ねさせていた
だきました。

どうか協力をお願いいたします」

国際的犯罪者になってしまった両親、

いや、間違いなく父親の巻き添えをくった母親が不敏でならない
が、

それよりも聞くことはある。

「父は何をしたんですか？」

「申し訳ありませんが、上からの情報が下りて来ていません。私では答え兼ねます」

まるでそう答えるように仕組まれているようだ。事実も多少は混じっているようだが。

「そうですか、でしたら私では答え兼ねます。

両親は長い間不在で連絡も絶えています。

何よりまだ弟達にはショックを与えたくはないので失礼します」

そう言って青悟はインターホンを切った。

「俺はあいつらの所にいるといったが？」

振り返れば次男坊が青悟の後ろに控えている。

「心配するな、全員近くにいますから」

そして見えるくるとした丸い瞳。

全員そこにいるのは分かる。

「桃、おいで」

「はい！」

嬉しそうにぴよこぴよこと桃華は青悟に飛び付いた。

その抱き上げた青悟の顔も緩んでいることは言うまでもない。

「そこにいることは分かってるから出てこい」

そして出て来る弟達。

一応、命令違反には違いないが責めるつもりはない。

「青悟兄さん、やっぱり怒ってる？」

「怒ったらダメよ？」

末二人のうるうるした目に勝てるほど青悟は鬼ではない。

「心配したんだろ、だったら怒らないさ。

だが、すぐに旅行の準備をしろ。

思ってた以上に事は深刻になりそうだ」

「へっ？ どうして？」

黄助の問いと同時にガラスの割れる音が響き渡る。
来るべきときが来たのだった。

第九話：対峙

須藤家は比較的に平和から掛け離れている。それはけっして人種差別というわけではないが、聞けばたいいていのものが手を出すことをやめようとする。

「ガラスが割れたな」

「ああ、しかも食器もやられた」

紅輝と水稀は冷静に現状を把握した。

彩は桃華をギュッと抱き寄せる。

幼い桃華に危険な目など遭わせたくはない。

「兄貴、やって来ていいだろ？」

「僕もいくよ！」

黄助と碧は逸る気持ちを抑えていた。

あくまでも青悟の許可無しに攻撃することは禁止されている。

「待て、まずは俺が行く。」

うちの大事な財産が吹き飛ばされてる気もするしな」

弟達是不気味に笑う青悟を見て一気に真っ青になった。

須藤家の食卓にあるもの、正確にはタンスの中にあるものだ。

「青悟さん……」

彩は心配そうに尋ねるが、青悟は優しく答えた。

「大丈夫、彩ちゃんを危険な目に遭わせたりはしないよ。

うちの大事な看護士に怪我されるわけにはいかないからね」

「青悟さん……」

二人の世界を止める野暮は須藤家にはいない。

「紅輝、皆を頼んだ」

「任せとけ。水稀、黄助、旅行の準備をしてこい。

碧と桃は彩ちゃんを守れ」

参謀隊長は的確に指示を出した。

いつでもどこへでも援護にまわれる位置に紅輝は付ける。

「ラジャー！　しばらく学校にいけないのかあ、残念だ」

「そうは見えないがな」

それだけ言って二人は瞬時に二階へ駆け登る。

「彩ちゃん、僕がついてるから大丈夫だよ」

「桃もついてる！」

幼い天使二人が彩に眩しく微笑みかけた。

そして、怒り爆発寸前の男は惨劇となった台所へと向かう。

「……うちの食卓をよくも」

「そう怒らないでいただけないだろうか、須藤青悟君」

煙の中から意外な人物が大勢の手練をつれてやってきた。

「……なるほど、警視庁のお偉いさんが暴力団を連れてやってくるとは」

青悟は呆れていた。しかし、それに相手は動じない。

「さすがColorfulの長兄だね。
博識だとは聞いていたが」

青悟は少し眉をひそめる。

「Colorful」とは聞き慣れない単語だ。

「俺達をまとめてそう呼んでるみたいだが、一体うちになんの用だ」

「何、簡単なことだよ。」

君達の身柄をこちらで拘束したい。

君達のご両親には手を妬かされているからね。

「こちらの指示に従ってさえもらえば悪いようにはしないよ」
「断る！」

青悟は言い切った。

第十話：迫力勝ち

青悟の声が響き渡ったとき、

二階の部屋で旅行の準備をしていた水稀と黄助は窓から下の様子を伺った。

普段からこんなことがあるだろうと荷物はまとまっていたため、そう急ぐ必要はなかった。

「警視庁の鹿田か。世の中も物騒なもんだ」

テレビで何度か英雄的扱いを受けていた男に水稀は見覚えがあった。
た。

しかし、ニュースなどと無縁な弟はその場の状況のみ興味を示す。

「水兄貴、下の奴ら暴力団と暴走族じゃねえか？」

「ああ、間違いないが五十人いればいいところだろ。」

あれくらいの人数なら青悟兄さんだけで終わる。

とりあえずお前は車に荷物乗せてこい。キーも忘れるな」

上の兄の言うことは緊急事態の場合は逆らうことを禁止している。
家族分の荷物を持って黄助は一階に駆け降りた。

「さて、問題は彩ちゃんだけどうするかだな」

パスポートを見ながら水稀は溜息をついた。

結果は分かっているが……

「随分早い返答だね」

「ああ、俺達にとって国家権力を使って脅しに来る奴ほど信用ならないものはない。」

しかも武力で解決しようという態度も気に喰わない。

何よりうちの末っ子の大学資金を一気に消してくれた奴に払う礼儀もない！」

まさに青悟の不機嫌はマックスだった。

エンゲル係数高い須藤家でも、

桃華の学費だけはコツコツと貯めていたのである。

だが、カードに通帳に印鑑まで消し炭にされては元も子もない。

「一千万貯めてたんだからな、きっちり返してもらおう！」

「金か・・・ならば話は早い。」

鹿田は黒トランクケースを持って来させた。

「二千万を君達家族に渡そう。」

末娘さんの教育費も付ける。

ただ、Colorfulの力を我々に貸してもらいたい」

すると青悟は溜息をついた。そこに紅輝がやってくる。

「紅輝、こいつらを全て片付けろ。」

金は本物のようだからもらっておけ」

「分かった」

それだけ青悟は告げて家の中に入っていく。

「青悟君、それが君の答えかい？」

「そういうことだ。わざわざ兄さんが出刃るまでもない。」

さっさとその金だけ置いて消えろ！

うちに砲撃して来た奴らに手加減はしない」

しかし、その脅しが一般的な猛者達に通じるわけではない。

「ヒョロ坊主がでしゃばるな！ 拳銃を見たことがあるのか？」

その瞬間に発砲される。しかし、当たったはずなのに紅輝は倒れない。

「なっ！！」

「拳銃は嫌いだ。俺達が普通じゃないことがばれるからな」

紅輝は不敵に笑った。

第十一話：説得不可能

「あっ！ 青悟兄さん！ 無事だったんだね！」

「青兄！」

桃華はぴよこんと青悟に飛び付いた。

そして片手で桃華を抱き上げ、彩に厳しく告げる。

「彩ちゃん」

「私も一緒に行くわ。止めたって追い掛けますからね！」

青悟の予想通りの答えが返される。

「彩ちゃん、幾らなんでも危険だ。」

おばさん達だって許してくれないだろう？

それにのこして行くのだって心配」

「青悟さん！ 母達なら大丈夫！」

私が行くところが危険なら必ず後から追いかけてくる！

「だけど皆がいなくなつて困るのはすごく嫌なの！ だから連れて
いって！」

普段が穏やかな分だけ、青悟は迫力負けした。

だがやはり頭の回転は良いのか、逃げ道はあった。

「だけど彩ちゃんの分のビザとパスポートがないんだが・・・」
「心配いらねえよ。彩ちゃんの分はとつくに家で作らされたから」

水稀が青悟に手渡す。

間違はなく両親がこんなこともあるかと作っておいたに違いな

い。

「これで問題はないだろう。
服も母さんが用意していたみたいだし」

もはや青悟は認めるしかなかった。

将来自分の嫁になるであろう彩を置いていくのも、
留学していた時のような余裕がなくなる気がしないわけではない。
今回ばかりは、彩が嫌がっても連れていかなければならない気も
していた。

「分かった。だけど俺から離れないこと。
これが絶対条件だからな」

「・・・・はい」

彩はほんのり朱くなった。

間違いなくプロポーズにも聞こえる。

水稀は碧と桃華にタオルケットを持たせ、先に車に乗るように指
示した。

「青悟兄さん、紅輝兄貴は大丈夫なのか？」

あまり心配してない声で水稀は尋ねると、

「ああ、もう片付いてるだろう。
彩ちゃんと先に車に乗ってろ。
俺は台所を修復していくから」

さっき自分から離れるなど彩に言っただけなのに、
やはり長男の責務も果たしてしまう。

だからこそ彩は昔から青悟しか見えてなかったのだが。

「分かった。行こう彩ちゃん」
「ええ」

二人も車に向かった。

そして外では・・・

「さて、二千万は確かに貰ったが情報は少ないな。
そろそろ吐かないか、鹿田さん」

笑みが怖い。紅輝の脅しははっきり言って閻魔より怖い。
鹿田が乗って来たベンツの屋根に腰掛け、紅輝は尋問する。

「ば、ば、化物が!!」

鹿田はそうとしか言えなかった。

第十二話：謎の女

銃弾の類が効かない人間がこの世にいる。

それは青悟達の父親、須藤空だけだと鹿田は思っていた。

しかし、しっかりその血が彼の子供達に受け継がれているのである。

「さて、まだ口を割る気がないのか。

困った御仁だな」

悪魔だ。黄助がいたらそうつつこんだろう。

すでに言葉もろくに話せなくなるほど鹿田は恐怖の淵にいた。

「仕方ないな。早く父さん達と合流するか」

見切りを付けるのも紅輝は早かった。

しかし、ふと強烈な視線を紅輝は感じた。

屋根の上に立っていた女のものであった。

「さすがはColorfulの次男、須藤紅輝様ね。しかもいい男」

甘美な声だが歳は自分と変わらないぐらいだと紅輝は直感した。

そして碧達が感じていた視線もこの女のものだという可能性もある。

「どうも。そして一つだけ答えろ。

おまえはこいつらとグルか？」

紅輝は殺気を叩き付けるが、女は全く怯みはしなかった。

「ふふっ、こわいこわい。」

残念だけど違うわ。そんな奴らと私と一緒にしないで。

ただ、情報は持つてるけどね」

女は一枚のディスクを紅輝に投げ渡した。

「それを空さんに渡してあげて。」

今回の騒動であなた達は一働きしなくちゃいけなくなる。

また私とであることもあるかもしれない」

女は少しだけ笑った。

敵か味方かは定かではないが、ここで戦う気は失くなった。

「そうか。だが一つだけ覚えとけ。」

もし俺達に危害を及ぼすなら、兄さんの許可がなくても消すからな」

「・・・ええ」

そう答えると女は一瞬のうちに屋根から紅輝の目の前に現れ、

「あなたが私を思い出せたならね」

そっと唇に触れるだけのキスを残して消えていった。

だが、紅輝は平然として家族の元に急ぐ。

今は一刻も早くここから離れるべきだと直感していたからだ。

「紅兄貴！」

二台の車が紅輝にライトを宛てた。

「紅輝、すぐに乗れ。空港に向かうぞ！」

家の破壊された部分を一瞬の内に再生させ、持つべき荷物を詰め込んだ須藤家は、

紅輝さえ乗れば出発出来る態勢だった。

「ああ。それと兄さん、こいつを預けとく」

「なんだ？」

差し出されたディスクは女から受け取ったもの。

「父さんに渡せてよ。」

詳しいことは後から話すから、ちゃんと彩ちゃんを守るように」

絶対わざとであろう、弟達は全員紅輝が運転する車に乗り込んでいたのだった。

第十三話..じいちゃん

高速道路を二台の車が快調に空港まで走る。

紅輝の運転する車には助手席に水稀、

次の列に黄助、最後に碧と桃華が眠っていた。

「紅輝兄貴、一体あいつらの目的って何だったんだ？」

コーヒーを飲みながら水稀は尋ねる。

「さあな。ただ、俺達まとめてColorfulとか呼ばれてたからな。

どうせ父さんが何かやらかしたんだろ」

おそらく当たっているだろうと水稀は思った。

「けどさ、警察官が動いてるんじゃないやアメリカに出れるか怪しくな
いか？」

サービスエリアで買い込んだおにぎりをぱくぱく食べながら黄助
は尋ねると、

意外そうな声で紅輝は答えた。

「黄助がまともなことをいうなんて珍しいな」

「おい、いくらなんでも分かるぞ」

黄助は文句を垂れる。

だが、二人の兄は平然として答えた。

「黄助、この世の中にはいろいろな権力が渦巻いていてな、飛行機ぐらい簡単にチャーター出来る人物もいるんだよ」

それだけ聞いて黄助は青くなった。

確かにそんなことが出来る人物は身近にいたのだ。

「じいちゃんか・・・」

「そういうこと」

須藤家の祖父とittedただけで日本人なら分かることが多々ある。

表向きは大物政治家、裏ではかなりの暗躍者だが、

それを嗅ぎ回るライターを見事に味方に付けているのだから性質が悪い。

自分達の父親の父をやっているだけはあるのだ。

「なるほどね。だけどじいちゃんなら今日の襲撃ぐらい防止できなかったんじゃないか？」

飛行機チャーター出来る実力者でもあるならなおさらだろ」

黄助はたまに核心を突く。それも見事にだ。

「兄貴、確かに一理あるぞ。

じいさんが防げない事態が起こってる可能性はある。

飛行機ぐらいは何とかなるかもしれないが、その後のことは・・・」

その時、黄助の携帯の着信音が鳴り響いた。

「じいちゃん」の文字が映し出されている。

「じいちゃん！ どうしたんだ？」

「黄助か！ 全員無事か！？」

明らかに祖父の声は慌てていた。

「ああ、今空港に向かつてる」

「そうか！ だったら行き先を軽井沢に変更しろ！ 機長には話を通してある！

空も日本に帰って来てるからの！」

「親父が戻って来てる！？」

紅輝は水稀にかわるように促した。

「じいさん、水稀だ」

「おお、水稀も無事か！

いいか、今回お前達 Colorful es は裏世界の奴らのターゲットになった。

おそらく常人以上のパワーが奴らの目にとまったのじゃろう」

「裏世界？ やくざとかそういう類のか？」

だとすれば少しは話も分かるが、
祖父の答えは予想外のものだった。

「違う。裏世界とはもう一つの世界、異世界と呼ばれるものじゃ」

第十四話：前世

世の中に異世界なんてものが存在する。

俄かに信じがたい話ではあるが、

それが事実なら受け入れるのも須藤家の方針である。

「異世界か。一体どんな世界なんだ？」

いたって水稀は冷静だった。

もともと自分達の存在も不思議という部類に入るのだから……

「前世の記憶というものが水稀には残っておるかの？」

祖父の問いに水稀は少し眉間にシワを寄せた。

「いや、全くない。だけどそれが何の関係があるんだ？」

もったもた質問である。

そこからの話が実に信じがたいものだった。

「お前達の前世の世界をこっちでは裏世界と呼んでいる。

ただ、この世界で裏世界を知るものは数少ないがの」

確かに言ったところで信じるものすら少ないだろうと水稀は思った。

「だが、実際にその世界は現在も存在し、お前達はこう呼ばれていた」

「Colorful es か？」

水稀の発した単語に祖父は重く頷き答えた。

「そうじゃ。Colorful esとは裏世界でも有名な兄弟での、Colorful esがいる戦場にはどんなものでも恐れを成していた。

そしてそのColorful esをまとめる王がお前達の父親、須藤空になる」

「・・・ちよつと待てよ。何だか俺も混乱して来た。あくまでも前世の話だよな？

今の口ぶりだと父さんはずっと前世から生きてきたように聞こえるんだが」

自分達の父親が前世の裏世界で王だったということまではまだ理解できる。

そして、今でも裏世界というものが残っているのなら信じてみてもいいと思う。

だが、前世から生きて来たとなるとそれこそ本当に信じられなくなる。

「空は、いや、正確に言えば天空王はお前達がもう一度生まれ変わ

り、そして裏世界に戻ることを待っていた。

歳もとらずにこの世界と裏世界を行き来しながらの」

「そんな馬鹿な事が・・・」

しかし、祖父の口ぶりから嘘は感じ取れなかった。

仮にも自分達を生まれたときから可愛がってくれた祖父だ。

「信じられなくて当然じゃが、裏世界の入口は開かれておる。
日本では軽井沢のわしの別荘のみ。すぐに向かうといい」

そこで電話が切れた。

水稀は混乱していたが、彩の携帯に電話をかける。

「はい、どうしたの？」

「・・・彩ちゃん、行き先を軽井沢に変更するように青悟兄さんに言って」

「軽井沢に？」

青悟も耳を傾ける。どのみち空港に向かうことに変わりはないが。

「ああ、機内で詳しいことは話すけどさ、
どうやらかなりの面倒を背負いそうだ」

今言えたことはそれしかなかった。

第十五話：三人の会合

空港に到着すると祖父の部下であろう人物に出会い、すぐに飛行機に乗るように指示され、あれやこれやと離陸する羽目になった。そしてさすがの三男坊より下は睡魔に襲われたのである。

「彩ちゃんも眠ればいいのに」

さすがにこの混乱で疲れたであろう彩を心配するが、

「大丈夫よ、青悟さん。」

私ももつといろいろ知りたいもの。

皆が前世にいた世界なら私もきつとそこにいたはずよ」

ふんわりと笑う彩に青悟は癒される。

さすがは看護士の卵だ。

「前世か。まあ、俺には少しだけ記憶があるがな」

「初めて聞いたな。」

まっ、青悟兄さんがそんな幻想を話す方がよっぽど不思議だが」
「ああ、違うない」

三人は笑った。論理的思考の青悟に幻想話は似合わない。

「夢のような話だがな、さっき水稀が話してくれた事には近いよ。俺達は大軍勢を相手に戦っていた。」

しかも今以上の魔法使いでもあったしな」

「再生能力以外にか？」

青悟は壊れたものを元に戻す超能力を持っていた。
それが砲撃を受けた家でもだ。

「ああ。この世の中では間違いなく異端的存在だとは思っていたが、実際に前世の影響を受けているなら話の説明は付くといえは付く。それが今でも残っている世界ならなおさらな」

受け入れなければならぬ真実は近づいている気はしていた。
そして彩も話してみる気になった。

「あのね、青悟さん。私も時々見る夢があるんだけど聞いてくれる？」

少しだけ遠慮がちに彩は尋ねる。

「いいよ。どんな夢？」

「ええ、私は後宮にいられていたの。」

それも源氏物語の桐壺みたいな境遇で本当に苦しかったんだけど、
桃華ちゃんがやってくるのよね。

そしてこう言ってくれるのよ」

彩はニツコリ笑って答えた。

「彩ちゃんは私達Colorfulsが守るんだよ。だから心配しないで」

青悟と紅輝は顔を見合わせた。

彩がこんな嘘話を作るわけがない。

それに何となく彩の話を知っている気がする。ただ、そう感じた。

「だからきつと私も皆の前世に巻き込まれている。

これからどうなるか分からないけど、

私も一緒にいてもいいでしょう？」

それだけが彩の不安だった。

須藤家のそばに、いや、青悟のそばにずっといたいとは昔から思っていた。

それがなくなる気がしていたのだ。

「彩ちゃん、心配しなくていいよ。

彩ちゃんは俺にとって大事な」

紅輝はまさかと耳を疑ったが、やはり青悟は青悟だ。

「彩ちゃんは大事な妹だからね」

拍子抜けしたのは眠っていた三男坊以下にも伝わっていた。

飛行機は軽井沢に近づいていた・・・

第十六話…永き物語

軽井沢の祖父の別荘ははつきりいつてそこらの別荘より豪勢だ。特に青悟は秋の軽井沢が一番好きだった。理由は一つ。落ち着くからだ。

「さて、俺達も眠ろう。」

昼まで寝こけても周りに厳戒体制しいておけば問題ないしな」
「そうだな。じゃあ、また明日」

それがこの日のこの世界で交わした最後の言葉だった。
別荘は裏世界の扉を開き、
彼等を前世のあの日々に連れていく……

長い、永い夢物語だった。

青悟は宮殿の自室で安らかな寝息を立てて眠っていた。
殺風景な部屋に立ち込める高貴な香り。

真っ白な壁にいくつもの本棚が並び、
次女が今に目を醒ますであろう主のために服と水を用意していた。

「青龍様、朝ですよ。起きてくださいませ」

青悟の事を青龍と若き次女は呼ぶ。
それが彼の名前だった。

「……ここは」

青龍は目を醒ます。朝に弱いことを知っている次女は微笑んで答えた。

「青龍様の寝室でございます。
そして私は次女の梅香でございますよ」

青龍はぼんやりとその状況を把握し始めた。

確か昨日は戦に勝ち、大騒ぎしていた弟達より早く自分は床にいたのだ。

「分かっている。それより、父上はまたどちらかに出掛けられたのか？」

梅香に尋ねると、梅香は青悟を起こしながら答えた。

「ええ、今日は王妃様と隣国の会議にご出席なさっています」

「そうか。梅香、下がっていいよ。」

桃姫がぐずり出す時間だろう？」

青龍は笑った。梅香は青龍と桃姫の次女でもあった。

末っ子は人見知りが激しく、心を許したもののしか相手にしない。

逆に言えば、桃姫が心を許すものは青龍達Colorful
も信頼出来るわけだ。

「畏まりました。青龍様のお世話も早く奥方様に御譲りしたいのですけど、

まだ見つかりませんか？ 彩様は」

梅香は青龍に尋ねる。

青龍はずっと探している娘がいた。その名前が

「彩」。

青龍の見る夢の中にいつも出て来る愛しい存在。

医者でもある青龍は各地に出掛けてその娘を探していることは宮殿の中でも有名だ。

「ああ、見つからない。

後宮に入ってくる女達の中にも彩らしき人物はいないのか？」

毎日の日課のように尋ねる。

しかし、梅香は首を横に振ることしか出来なかった。

「申し訳ありません」

心の底から梅香は謝った。

「・・・そうか。さあ、早く桃姫の元へ行ってくれ。

「畏まりました」

梅香は一礼して青龍の部屋から去っていった。

第十七話：桃姫の我が儘

梅香は末っ子の桃姫の元へ急ぐ。

甘えん坊で人見知りの桃姫がよく自分に懐いてくれると不思議に思いつながら、

梅香は桃の匂いが立ち込める部屋に入った。

「梅ちゃん！」

「おはようございます、桃姫様」

飛び付いて来た桃姫を優しく撫でてやる。

「さあ、湯浴みに参りましょう。」

今日は柚子湯が張ってあります。

とても良い香りと伺っておりますわ」

「梅ちゃんも一緒に入ろう！」

「ええ、お背中をお流し致します」

「桃姫も流す！」

楽しそうにいう桃姫に少々梅香は困惑した。

ただでさえ自分は青龍と桃姫の次女という恵まれた役なのに、

これ以上深い仲になれば後宮の女達は当然、他の次女も黙ってはいない。

「桃姫様、それは困ります。」

桃姫様に私などの背中を流させる事など出来ません」

「いやあ！ 桃姫は流すの！」

梅ちゃんと流しっこ出来ないなら桃姫は湯浴みしない！」

兄達に甘やかされた結果はここにある。
こういうときは梃子でも動かない。
しかし、助け人はやってくるものだ。

「梅香、俺達に免じて桃姫の我が儘を聞いてやってくれないか？」

梅香はすぐにひざまずいた。

やって来たのはColorful次男の紅炎、三男の水真だ。

「紅兄！ 水兄！」

桃姫は満面の笑みを浮かべる。

「桃姫が無理を言ってすまないとは思いますが、俺達が梅香を守るからさ、

桃姫の我が儘を許してやってくれ」

水真の声に梅香は少しだけ鼓動が速くなるのを感じた。

青龍にも紅炎にもないこの感情が恋だと知るのに時間はかからなかったが。

「勿体ないお言葉でございます。

では桃姫様、お願いいたします」

「やったあ！！」

桃姫は跳ね上がって喜び、大浴場へと梅香を引っ張っていった。

「……梅香を青龍兄さんと桃姫に取られては仕方ないか」

紅炎は水真をからかう口調で言うが、

水のような性格をした水真を取り乱すことは難しかった。

「構わないさ。青龍兄さんにはすぐにでも嫁さんがやってくる。

桃姫だってもう少し大きくなれば梅香以外の次女を寄せ付けるさ。先祖代々の後宮だかなんだか知らないが、興味ないのは兄貴達の影響だよ」

Colorfulに気に入られて将来の安泰を考える女達などに水真は興味がない。

それより桃姫が心を開き、青龍が彩を見つけるまで傍に起きたいと思う梅香の方が、

水真にとってその辺の女達より魅力的であった。

第十八話…予知

後宮の前を堂々と桃姫に引っ張られながら梅香は痛い視線を感じていた。

しかし、青龍達が溺愛している桃姫に取り入ろうとするものはいても、逆らおうとするものはいない。

事実、桃姫に気に入られた梅香は女達の標的にされたが、そこに現れた水真が一喝し、桃姫の次女にしてしまったのである。それだけではまずいだろうと、青龍までもが梅香を守ることにしてしまったため、

彩が現れるまでの次女として梅香は過ごしているのである。

「……梅ちゃん、彩ちゃんが近くにいた気がする」

「彩様……ですか？」

後宮に近づいた途端に桃姫は言い出した。

桃姫の力は予知。時々、夢にまで出て来るらしい。

「うん、青兄が探している人だよ。

だけどここにはいないよ。

外、村、狐、森、宿、化け物……」

「桃姫様！」

力を使い果たしたのだろう、桃姫はその場に倒れ込んだ。

「桃姫様！」

「桃姫様！」

「梅香！ あんた桃姫様に何をしたの！」

「すぐに梅香を桃姫様から剥がしなさい！」

我先に桃姫を助けようと奪い合いが始まる。女達の醜さはここにある。

だが、ずっとその争いを止めるものがいた。いや、正確には豪快にか……

「やいやい！ 兄貴と桃姫専属の次女に何をしてる！

そこのけそこのけ黄閃様のお通りだ！」

「黄閃兄さん、恥ずかしいからやめなよ」

後宮の女達はひざまずいた。

Colorfulの四男と五男坊だ。

「桃姫のやつ予知のし過ぎだ。

まっ、青兄貴のためなら仕方ないけど」

「梅ちゃんも大丈夫？」

緑翔は手を差し延べるが掴むことは許されない。

「平気でございます。私より桃姫様を！」

「梅ちゃんも労らないと水兄貴から殺されるんだけどな……」

苦笑いしながら黄閃はひょいと桃姫を緑翔に渡し、自分は梅香を肩に担いだ。

「黄閃様！」

「うん！ これが楽しいんだよな！」

一体何が楽しいのか梅香には理解できなかったが、女達の青ざめようは黄閃を楽しませるには十分だった。

「それじゃ、青兄貴の元に退散！」

二人はその場からすぐに消えた。

残された女達は気付くまで数十分を要したという……

「黄閃様！ もう平気ですから降ろしてくださいませ！」

梅香は必死に叫ぶが黄閃はそのつもりはない。

「いいんだよ。青兄貴に怪我とか疲れとか癒してもらった方がいいよ。なっ、緑翔！」

「うん！ それに梅ちゃんにはさっきの桃姫の予知の事も話してもらわなくちゃいけないしね」

この兄弟にかかれれば梅香の言い分はすべて却下される。だが、それをげんこつで片付けるものが現れた。

「黄閃！」

振り返ればそこには水真がいた。

梅香は担がれていたためにその形相が見えない。

そして語られない一部始終の後、

梅香が再び黄閃を見たのは、青龍の部屋に着いてからである……

第十九話…参謀長官

「全く、やはり後宮の女達は恐ろしいな。

まともな奴が何人いることやら」

「それは次女も同じさ。梅香を怪我させるんだからよ」

青龍の部屋には黄閃を除く兄弟が集結していた。

梅香はどうして自分がこんな場所にいられるのか不思議でならなかったが、

青龍に治療してもらっている間は動くわけにはいかなかった。

「さて、桃姫はなんて言ってたか覚えてるか？」

足に包帯を巻いてやりながら青龍は尋ねる。

「はい、正確とは言えませんが、『外、村、狐、森、宿、化物』という言葉は覚えています。

おそらく田舎の方を予知されたのではないかと思われませんが・・・」

梅香は告げた。確かに田舎を連想するのが普通だが、

どこの田舎かという情報が少な過ぎる。

それを青龍のベットに寝かされている桃姫に今、予知させるのは酷だ。

「そうか。だが、かなりの奥地だということは予測できる。

桃姫が見たもので印象に残っているものが人ではなく狐だしな」

「そうともかぎらねえぞ？ 狐みたいな人間かもしれないし」

復活した黄閃も青龍の部屋に入ってきた。その手には間食用のお菓子だ。

「狐みたいな人間って……まあ、おまえの勘も頼りにはしてるが」

「へへっ！　なんか今回はすごく自信があるんだよな！
今まで彩ちゃんのことに関しては全く働かなかったんだけどさ」

黄閃は超直感の持ち主だ。そのおかげでColorfulは今まで何度も命拾いしている。

「青龍兄さん、桃姫が言った残り五つの情報を組み合わせると浮かぶ場所があるんだが」

紅炎は地図を指し示した。

「人買いの里か」

「ああ、宿がいくつか立ち並び森には化け物も出る。

村という人口だ。後宮には多くの国から美人が集められているが、未だにこの地方出身はいない。行ってみる価値はあると思うが」

紅炎はニツと笑った。それには他の兄弟も大賛成だ。

「行く！　ついでに人買いの里もブツ潰そうぜ！」

「黄閃にしてはいいことを言うな」

「本当だね」

弟達は口々に言うが、一人考え事をする長兄はいた。

「それはいいんだが、俺達が全員ここを離れるわけにはいかないだろう」

もったもな意見だが紅炎は全て考えていた。

「心配するな。うちには優秀な将兵が揃ってるし、俺の片腕を梅香に付ける。Colorfuls全員不在という情報を流してやってもいいが」

青龍は参謀長官に恐れ入ったという表情を見せた。全て決定したのである。

「そうと決まれば時芽、しばらく梅香の護衛を頼む」

紅炎が屋根に声を発すると時芽はおりてきた。

「かしこまりました、紅王」

その女こそ、現実世界で紅輝に口づけた者であった。

第二十話：人買いの里へ

時芽は非常に美しい女だと梅香は思った。

紅炎片腕の隠密であるため、普段はその姿を表すことはない。

しかし、紅炎の命であれば、おそらく命すら捨てる覚悟もあるだろう。

「梅香様、もっと寛がれてはいかが？」

水真様はおそらく一週間はお戻りになれないと思いますが」

次女に様をつける隠密がここにいる。

梅香は慌てふためいた。

「時芽様、私に敬称はいりません！ ただの次女なんですから！」
「フツツ、将来は水真様の奥方様でしょう？ 今から慣れていた方がよろしいわ」

梅香は真っ赤になった。

さすがは隠密、自分の隠している恋心もどうしたら自分が照れてしまうかも心得ている。

「私は水真様には釣り合いません・・・」

「だけど、水真様はあなたを奥方に迎えようと思われているわ。

あと一年で水真様も十八。青龍様が彩様を迎えられたら覚悟しておいた方がよろしいわ」

梅香はさらに混乱するのだった。

だが、ようやく落ち着く言葉が聞ける。

「彩様がこちらにいらっしやったあかつきには、おそらく梅香様がお世話係になるはず。彩様のことを守ってあげてくださいませ」

時芽は心の底から述べるのであった。

そして話はColorfulへと移る。

世の中には幻想的動物がいるもので、Colorfulはそれぞれの名前の色をした星獣を持っていた。スピードは馬の十倍という動物に……

「待ってよ！ 黄閃兄さん！」

星獣に乗った兄弟達は、人買いの里へと向かっていた。そして相変わらずのやんちゃ坊主は、黄色の星獣に跨がり爆走中である。

「遅いぞ緑翔、もっと飛ばせ！」

威勢の良い声は森の静寂さを破壊する。

「全く、仕方のない奴だな。」

黄閃！ 桃姫の調子もまだ良くないんだ。お前は先に宿を取ってこい！」

「がってん！ 行くぞ、緑翔！」

「分かったよ」

二人の弟達は青龍の命のもと、さらに星獣を翔させた。

「桃姫、寒くないか？」

馬車の中で毛布に包まっている桃姫に青龍は優しく尋ねると、コクコクと桃姫は頷いた。

「やっぱり宮殿で休養させるべきだったか」

「そうでもないだろう。青龍兄さんの役に立ちたいから桃姫は馬車に乗り込んだんだ。

これで留守番なんかさせたらしばらく桃姫から嫌われてたんじゃないか？」

紅炎の言葉に青龍は青くなった。

それだけはゴメンである。

「それより、兄さん達なら気付いてると思うが、伝令みたいな奴が一人逃げたぞ」

水真は森の中で動いた影を見逃さなかった。

「気にしなくていい。敵が宮殿に総攻撃をかけてくることが紅炎の狙いでもあるからな」

満面の笑みを浮かべる紅炎が非常に恐ろしく思った。

第二十一話：やんちゃな救世主

生まれた時から凄く寂しかった。

ボロボロの服を着て、粗末なご飯を食べて、沢山怪我もして、今日
日は売られる。

「綺麗だよ、彩。やっぱりあんたを育てて正解だったよ！」

狐のような顔をした宿の女将は、満面の笑みを浮かべた。

里一番の上玉と言われる彩は、着たこともなかった綺麗な着物を
着て、人買いに高値で売られるのだ。

「女将さん、私は……」

彩は俯く。いつもならここで打たれるが、今日はそうはいかない。

「馬鹿を言うんじゃないよ！」

今まで捨てられていたあんたを育てるのにどれだけかかったと思
ってるんだい！

体売ることからだって今まで逃がしてやったんだ！

それもあんたを高値で売ってやるためじゃないか！」

無茶苦茶な言い分である。

確かに、今まで彩は酒の席に出されることはあったが、
体売ることは止められていた。

理由は簡単。傷一つない女の方が高値で売れるからだ。

「なに、あんたを買って下さるのはそれは立派な領主様だ。
こんな縁談断ったら罰が当たるよ！」

こんなに綺麗な絹の着物までこしらえて下さったんじゃないか」

見ただけで人買いの里の人間にとっては上等品であった。
その他にも金品が多数この宿に運び込まれている。

「だけど、私！」

彩はその場から飛び出した。

「お待ち！ あんたがた、彩を捕まえとくれ！」

人買い達は狐女将命じられて多少嫌な顔をしながらも、彩をすぐに追いかけ始めた。

嫌だ、嫌だと彩はとにかく走った。
いくら捨て子の身でも、自分が商品のように扱われるのは嫌だった。

どんな目に遭わされるかなど想像もしたくない。

「待て！ 待たなければ撃つぞ！」

人買い達は必死で彩を追い掛ける。

自分達も彩を連れ帰ればそれなりの報酬がもらえる。
それほど買い主は彩を気に入っていた。

「待て、所詮はただの人間だ。俺に任せろ」

もう一人の人買いがスピードを上げ、彩の腕を掴み捻りあげる。

「痛い！ 放して！」

彩は必死にもがくが、人買いは話す気など毛頭なかった。それどころか、彩の美しさに欲望を募らせる

「おい、この女はかなりの上玉だ。やっちまおうぜ！」

彩の腕を捻りあげている人買いは提案する。

「そうだな。あんな宿にいるんだ。男の一人や二人は知ってるだろう」

もう一人の男も涎を垂らす。

全てがここで終わると彩は覚悟を強いられたが、暴走やんちゃ坊主の蹴りの方が早かった。

「うわちよく！！！」

一体なんの掛け声かは知らないが、彩の腕を捻り上げていた男は顔面を蹴られ悶絶する。

「えっ！」

彩は驚いた。すごく懐かしい気配がここにある！

「黄閃参上！」

高らかに黄閃は名乗りをあげた。

第二十二話：黄閃の活躍

Colorful 四男坊黄閃。

腕白、やんちゃ、喧嘩っ早いの代名詞を背負う自称、

「人より正義感のある平和主義者」。

そんな少年が美女が悪者に襲われていたらやることは一つ。

「さて、怪我はない？ 姉ちゃん」

満面の笑みを浮かべて黄閃は尋ねる。

それだけの余裕があった。

「ええ、それより逃げてください！

ここにいたらあなたまでも奴隷にされてしまう！」

「奴隷ねえ……おそらく世の中のかかなりの確率でならない気がするけど」

黄閃は苦笑を浮かべながら答えた。

王子様と言われる身分を売る人買いは滅多にいないだろう。

むしろ、兄達なら面白がって黄閃を喜んで差し出しそうだが……

「とりあえず、あと一人倒せば終わるからさ、少しだけ待ってて」

勝ち気な笑みが彩に向けられる。

太陽みたいな少年は彩の心に少しでも希望を持たせた。

「お前、俺達に盾突いてただですむと思うなよ！」

「はいはい、そんな台詞はいいからかかってこいよ」

喧嘩モードになった黄閃ほど止めるのに苦労するものはない。
一瞬で止められるのは兄達だけだ。

「小僧が!!」

「遅い!!」

腹部にパンチ一発。それで片が付いた。

彩は黄閃の強さに呆然とするしかなかった。

「なんだ、やっぱり弱いんだ」

後片付けと言わんばかりに、黄閃は人買い二人をポイと投げ捨てる。

「あの・・・」

「黄閃兄さん! 待ってよ!」

可愛い弟はやっと兄に追い付いた。

「遅いぞ、緑翔。お前が来る前に一運動できたぐらいだ」

「それだけ飛ばしたんでしょ! それより、そこのお姉ちゃんはどうしたの?」

クリッとした目が彩をとらえる。

「ああ、奴隷にされそうだったところを助けたんだ。

はい、姉ちゃん捕まって」

黄閃は手を差し出すが、彩はその手を掴むことが出来ない。

「どうしたんだ？ 遠慮することないのに」

黄閃はしゃがみこんで手を差し出すと、

「足を怪我してるのに立たせる馬鹿をやるな！」

「青龍兄貴！」

黄閃はしまったという表情を浮かべた。

医者根性丸出しの兄にとって患者を労らないことほど説教の種にならないものはない。

「あっ……！」

彩は青龍を見た途端、小さく驚いた。

どこかで出会ったことがあるような気がしたからだ。

「弟がすまないことをした。」

すぐに治療させてもらうのでお許し願いたい」

青龍は彩の白く細い怪我だらけの足に遠慮なく触れる。

弟達から見れば少しぐらい遠慮すればいいのにとつつこみたいところだが、

医者には無理な相談なのだろう。

「ありがとうございます……青龍様」

彩は遠慮がちに礼を述べた。

「いや、気にしないでくれ。」

それより、聞きたいことがある。

この里に彩という女性がいなかったらどうか」

「彩……私は彩と言います」

偶然の出会いだった。

第二十三話：朱

青龍は驚いた。

いきなり彩に出会えるなどと思っていなかったのである。

「……ですが、彩という女性はまだまだたくさんいらっしゃることでしょ。

この里の領主様のもとにも綾という美しい方がいると聞きます。青龍様のお探しになられている彩様はどんな女性ですか？」

彩の問いに様々な反論が返って来た。

「姉ちゃんが彩ちゃんに決まってるよ！

青龍兄貴！ 嫁にするなら絶対彩ちゃんだ！」

「僕もそう思う！ 彩ちゃんはすごく可愛いもん！

僕もこんなお姉ちゃんが欲しい！」

下の弟達は話が恐ろしく早い。

それに彩は顔を赤らめる。

「おいおい、ちょっと待てよ。

いくらなんでも親に了承を得ないといけないだろう？

まずは彩ちゃんの親に挨拶するべきだ」

「そうだな。まっ、兄さんの嫁になる事自体に文句が言える女もないぐらいだし」

上の弟達は着実に話をまとめていく。

彩はそれを聞いてパニックに陥った。

「あ、あの！ 一体！」

「すまない、今の事は気にしなくていい。

だが、親御さんのところには送っていく。

それと、彩ちゃんの村に宿はあるか？」

青龍の問いに彩は少しだけ落ち着いた。

どんな女でも、出会って早々青龍の嫁になれと言われて慌てないものはいない。

特に人買いの里の名を持つこの地域では、医者と言うことだけで名誉を持っている。

例えるなら人間が空を飛べるぐらいだ。

「宿はございます。私の家も宿を営んでおりますから」

「だったらそこに決定！」

早く桃姫を休ませてやらないとな」

黄閃は満面の笑みを浮かべたが、

彩の表情が少し辛いものになっていることを青龍は見逃さなかった。

「兄さん、とりあえず彩ちゃんのところにいこう。

何が起るのか興味もあるしな」

「紅炎、お前は本当に歪まないか心配だよ」

寧ろ手遅れだと下の弟達は敢えて突っ込まない。

理由は恐いからとしか言わないが……

「それじゃあ彩ちゃん、馬車の中に」

「何言ってるんだ！ 桃姫は風邪ひいてるかもしれないんだぞ！

兄貴の星獣に乗せてやれよ！」

「いや、風邪はひいてないが・・・」

いつもなら青龍の診断にケチを付けることは死刑に値するが、今日はなぜか青龍は強く出られない。

「青龍兄さん、言う通りにしといた方がいい。

さっきの伝令も気になるし、何より彩ちゃんってなんだか不思議な感じがするんだよな」

「僕も思った！ 彩ちゃんはすごいんだよ！」

理屈は通っていないが、何故か青龍も反対できなかった。

「分かった。彩ちゃん、俺の星獣に乗ってくれるか？」

「・・・はい」

彩は頬を朱に染めた。

第二十四話：狐女将

彩の育った村はいかにもぼったくりの多そうな場所だった。しかし、まだ人買いの里にしては宿がある分だけ治安もいい。事実、彩の育った宿はなかなか歴史ある老舗旅館だった。

「彩ちゃんの家は旅館だったのか」

「ええ、捨て子だった私をここの女将が育ててくれました。女将には大恩があるので」

その時の表情はなんだか悲しく見えた。少なくとも青龍はそう感じた。

「へえ、それじゃあ彩ちゃんはここのお嬢様なのか？」

黄閃の問いかけは最もだ。

小綺麗な着物を着た彩を人買いが連れていくなどなかなかない。もちろん、遊郭などという言葉に遠い性でもあるが……

「いえ、私は小間使いです。」

とてもそのような身分には……」

「今からお姫様にまで上がる」などと言える勇者はここにはいなかった。

あまりにも謙虚なところは梅香そっくりだ。

「とりあえず、泊めてもらおう。」

桃姫をいつまでも馬車に寝せておけないしな」

大事に、尚且つ微動だにしない安定性を絶対条件にして桃姫を抱える紅炎は、

桃姫の予言が当たっていることを実感していた。

間違いなく、彩こそが青龍が探していた女性だと……

「ああ。彩ちゃん、捕まって」

「……はい」

そつと彩は手を差し延べる。

もちろん多少の冷やかしが入るが、兄の一睨みで全て片付く。

「ありがとうございます」

「ああ」

そして、一行は宿の門を潜るのだった。

「彩！ あんたはどこに行ってたんだい！」

狐女将はお客がいるにも関わらず、大声で怒鳴り散らした。

せっかくの大金を逃した腹いせと言わんばかりに、平手で彩を打とうとしたが、

「やめていただけますか？」

青龍は狐女将の手を軽く止めた。

「あんたは引っ込んでいて！」

「私達は客です。今晚こちらに泊まらせて頂きたく彩さんに案内してもらいました」

それを聞いた女将はいきなり満面の笑顔を浮かべた。

理由は簡単。青龍達は上客だということが身なりでわかるからだ。

「ホホホホ：そうならそうと早くおっしゃってくださいまし。

彩、この方達を藤の間と白菊の間にお通しなさい」

それを聞いた彩はひどく驚いたが、

「構わない。紅炎」

「はい、兄さん」

紅炎は金を差し出した。

「これで三日は泊られますね。

くれぐれも兄の機嫌だけは損ねないよう」

ひどい釘打ちだと水真は思った。

第二十五話：兄弟会議

Colorful が案内されたのは畳が綺麗に張替えられてある質素な和室だった。

いつも洋式の部屋にいた彼等にとって、多少なりとも新鮮さは感じられた。

「思ってたより良い部屋だな」

「そりゃあれだけの金額だ。鼠と寝るのはゴメンだ」

紅炎と水真はそれぞれの感想を述べた。

因みに部屋割は青龍と桃姫以外は一緒にまとめられている。理由は一つ。弟達が騒ぐとうるさいという青龍の判断からだ。

「まっ、饅頭は値段の割には安物みたいだがな」

「そうか？ 結構うまいぞ？」

黄閃の味覚は

「腹の足しになれば何でもいける」である。
すでに兄達の饅頭はない。

「まあ、とりあえず彩ちゃんは見つかったんだ。

あとはあの狐女将から彩ちゃんを兄さんの嫁に貰うかだが」

「連れ去るなんて真似はしないだろうしなあ」

黄閃の答えに上二人は苦笑いを浮かべた。

二人の考えは何かに託けて彩を連れ去ってしまうことだったのである。

もちろん、後宮に入ってもらうとかの理由も考えたが、

出来ることなら自分達の身分は明かしたくなかったのである。

「彩ちゃんは見付けたんだけどさ、このまま帰るのも何だかなあ」

「僕も人買い達を懲らしめて帰りたい。」

彩ちゃんを苦しめる奴らなんかぶっ飛ばしてやるんだ！」

下の二人の意見に上の二人はもちろん反対しない。

政治的な見方からもほって置く事が出来ない現状だからだ。

「じゃあ、俺と水真でこの人買いの里の元締を探ってくる。

お前達は彩ちゃんを買おうとした連中が仲間を連れて来ないとも限らない。

青龍兄さん以外に指一本足りとも触れさせるな」

最後の言葉が非常に脅迫地味なものになっていたが、さすがに黄閃も理解したらしい。

「がってん！ 任せといってくれよ！」

「信用ないな」

「緑翔、頼んだぞ」

「うん！」

素直な五男坊の笑顔で弟会議は終わった。

一方、隣の部屋にいた青龍は、愛しき妹を心の底から心配しながら看病が続けていた。

いつもより疲労が溜まっているのだろう、桃姫は丸くなって眠っている。

「予知の通りだが・・・」

桃姫の髪をさらさらと撫でてやりながら青龍は呟く。

彩こそ自分が探していた女性だと青龍は直感していた。

だが、彩が言っていたもう一人の綾のことも何故か引っ掛かる。それがどうしてなのかよく分からないが……

「青龍様、よろしいでしょうか」

澄んだ声が弱々しく、そして震えている。彩だ。

「ああ、構わないよ」

穏やかな声で答えた分だけ、青龍は驚いた。

そこにいたのは身体がうつすらと見える着物を身に纏った彩だったからだ。

第二十五話：兄弟会議（後書き）

本当に放置していてすみませんでした！
これから楽しく読んで
やってください☆

第二十六話：覇氣

医者という人種は、たとえ女の裸体を見ようとも動揺しないと青龍は思っていた。

あくまでも一般的な見解であり、ろくでもない医者は除くと付け足しておく必要はあるが。

しかし、彩を直視することは出来ず、青龍はすぐに自分の羽織りに手が伸びた。

「彩ちゃん！ とにかくこれを着て！」

青龍はすつと彩に羽織りをかけてやる。

「いいんです！ 私は閨界の領主様の元に嫁ぐ身になっています。だけどそれが嫌で逃げ出したんです！
どうか、私を哀れと思うならこの身を買ってください！」

涙を流しながら彩は懇願する。

それが本心ではないことなど、迷いがあることなど、見破れないほど青龍は愚かではない。

「あの女将からの命令かい？」

「青龍様・・・！」

「だったら聞かなくて良い。

宿を世話してもらっただけでも充分なんだ。

それにコソコソしている従業員が屋根から覗いているのも気に入らない」

眼光鋭く、屋根の上に潜む従業員を青龍は射抜く。

その覇気に堪えられるものなどここにはいない。
従業員は一気に泡を吹いた。

「さて、彩ちゃん、どうしてこんなに辛い思いをしてまでここに
いる？

いくら人買いの里と言われるこの場所でも、助けを求めることは
出来るはずだ。

色王軍の支部だって決して歩いていけなくはない」

その軍の大將をはる男の言うことほどひどく説得力を帯びるもの
だが、

身分を明かしていないだけその効果は多少落ちる。

「……女將は、捨て子だった私をここまで遊郭にせず、闇界の
領主様の元に嫁がせるために育ててくださいました。

この人買いの里の女の子達は、たいていが奴隷船に乗せられるか、
遊郭としてこの里に留まるかです。

だから私は闇界の領主様に目をかけていただいた分だけ幸せでし
た。

だけど！ やっぱ怖いんです！ 私はそんなところに行きたく
ない！」

大粒の涙が溢れてくる。

それは彩の苦しみそのものだった。

「そうか。よく頑張った」

さらりと彩の髪をとかしてやる。

魔法の手があると言うなら、きっとこの医者のものだ。

「青龍様・・・！」

「大丈夫。彩ちゃんは連れていく」

「だけど！」

「俺が探していたのは闇界の領主の娘じゃない。

まさかこの人買いの里の領主にまでなっていたとは思わなかったが・・・いや、息子の嫁にか」

「青龍様？」

彩は不思議そうな瞳を青龍に向ける。

やけに詳しい事情を青龍が何故知っているのだろうか・・・

「彩ちゃん、俺達と一緒に来るかい？」

もちろん無理にとは言わないが」

彩の鼓動が一つ大きくなった。

一目惚れした人からの夢を与えられる言葉に吸い込まれていく。

「私・・・」

「彩はいるか！！」

乱暴に襖が開けられ、大男達が乱入して来た。

第二十七話…命じる者

長兄たるもの、いかなる時も守るべきものは守るという信念を貫く。

少なくとも青龍はそういう兄である。

だからこそ、弟達は文句と騒動を起こしながらも命令は聞く。

もちろん、青龍の説教が嫌いだからとも取られるが……

「高い宿代を払ってこの騒ぎとは……下がっていただこうか」

彩と桃姫を後ろにし、青龍はすつと立ち上がった。

三人来た大男達は、百八十センチ以上ある青龍の身長を遥かに越えていた。

その中で金棒を持った男が開口する。

「どけ優男！ この里の領主様が彩を買い取ると言ってるんだ！」

「断る！ 聖界では人身売買は死罪に値する！」

特にあの暗愚な息子の嫁になどさせるわけにはいかない！」

叩き付ける覇氣に大男達は電気が走るような感覚に陥るが、気絶はしなかった。

「ふん、ちびが生意気な口をきく」

「ただでかい奴に比べれば器は小さくないな」

皮肉である。体のでかさより器のでかさで競えばいいものと言っただけに留まらず、

そんなただでかいだけで自慢するのは馬鹿だと言っているのだ。

しかし、それに男達は気付きはしない。

「ふん、だったらその自意識過剰な器ごとお前の頭を割ってやる」
「青龍様！」

青龍が間違いなく殺されると彩は思ったが、それは大きな間違いだった。

「ばかな・・・！」

「己の器ぐらいはかれるようになれ。」
相手の力量を見定める物差しになる」

青龍は片手で金棒を止めていた。

いつもなら避けて相手に蹴りの一撃でも加えてるところだが、宿を壊すわけにはいかないと止めたのである。

「今引けば命だけは助けてやる。」

それに暗愚な領主に伝言も頼めるしな」
「ふざけるな！！！」

青龍に拳を振り下ろしたが最後だった。

好戦的な四男坊が男に殴り掛かり地に伏せさせたのである。

「兄貴に手を出すな。といっても意味ないけど」

ニヤリと浮かべた笑みは少年のものではなかった。
残っていた二人の大男達は青ざめる。

「さて、これで俺の伝言を頼めるだろうか」

大男達はひざまずく。そうせずにはいられなかった。

「色王軍の青龍がお前を潰しに行く。

まっ、先に行ってる弟達が潰すかもしれないがな」

「分かりました！」

大男達は倒れている男を担ぎ、この場から脱兎の如く逃げ出している。

「青龍様・・・」

「怪我はなかったか？」

微笑みかけてくるその表情が少し遠く感じた。

そして彩はすぐにひざまずく。

「青龍様！ まさか色王軍大将の！」

「コラコラ、兄貴の前で膝を折るのは嫁ぐときだけでいいんだって！
今は一般人なんだからさ」

黄閃は彩を止めた。

どうしてこんなにも儂いんだろう。

「ですが！」

「彩ちゃん、それでいいんだよ。

俺達は君を探しに来たんだ。だから君が俺達に命じても構わない。
それだけで俺達は動く」

真摯な瞳が彩を捕らえていた。

第二十八話：狐女将の陰謀

「彩！ 一体何の騒ぎだい！」

白々しく狐女将はやって来た。

彩を利用するだけ利用しようとした癖してよく言えるものだと言え、黄閃は感心した。

「すまない。俺達の部屋に闇界の領主の使いがやって来て暴れてくれたんでね」

「まったく。宿主として止めてくれないと困るんだけどな」

青龍と黄閃は文句を垂れるが、

「そうですか。ですが、お客様が彩にこんな恰好をさせたからでしょう？」

彩は闇界の領主の御子息に見初められた身。当然使いの者が止めるはず。

ですがその使いを追い払ってまで事に及ぼうとした責任はどのようにお取りになれますか？」

狐女将は醜く笑った。全て彼女はどのように転んでも言い訳出来るように、自分の私腹を肥やせるように仕組んでいたのだ。

「兄貴、兄貴にそんな趣味あったのか？」

「彩ちゃんにひどいことしたの？」

後から黄閃にはげんこつ一発はお見舞いしてやろうと青龍は思っているが、迫真の演技を見せる。

「ああ、だから今夜は彩ちゃんは俺の部屋で寝てもらう。

何、彩ちゃんを借りる代金ぐらい払ってやるさ。いくら欲しいんだ？」

「……それは出立の日に」

狐女将は心の中でほくそ笑みながら出て行った。

「青龍様……」

「そういうことだ。彩ちゃんを商品のように言ってしまうって申し訳なかったが、今夜はゆっくりこの部屋で眠ってくれ。

桃姫の体調も明日には回復すると思う。

回復次第彩ちゃんを連れて宮殿に戻る」

彩はフリーズした。宮殿、しかも色王軍のと言えば、

「め、滅相もございません！」

私のような者が天空王が住む宮殿に足を踏み入れるなど！」

「大丈夫だって！ 彩ちゃんはそのお姫様になるんだぜ？

自分の家なんだからわがまま言いながら過ごしたら良いんだよ」

彩は思考すら停止した。

捨て子の自分がお姫様、どこの国のお伽話なんだろう。

「黄閃、それ以上は言ってやるな。

とりあえずそう言うことだから今日は眠ってくれ。

黄閃と緑翔も寝なさい。紅炎達が戻ってくるのは明け方だ」

「俺は起きてるよ。兄貴だけに負担かけるわけにはいかないしさ」

気遣うのは兄に倒れられるわけにはいかないから。

しかし、三日や四日の徹夜ぐらいは何ともない男は、

「子供は寝て大きくなるもんだ。

お前が夜更かしできないことぐらい分かってるから今のうちに寝とけ。

それにすぐに働いてもらうからな」

「分かった。緑翔、寝るぞ」

黄閃が言う前に緑翔は眠っていた。

黄閃に振り回されてさすがに疲れたのであろう。

「仕方ないやつだな」

緑翔の体をすっと持ち上げ、器用にも足で襖を開けて黄閃は隣室に戻って行った。

「さて、彩ちゃんはそこの布団で寝てくれ」

「青龍様……」

「気にすることはないよ。ゆっくり休んでくれ」

「……はい」

彩はきつと眠れないとは思いながらも、体だけは横になるのだった。

第二十九話：出発前の一悶着

朝は早くもやってくる。

だが、黄閃は相変わらず寝こけていた。

「黄閃、さっさと起きろ。おいていくぞ」

多少乱暴に揺さぶり起こすのは水真なりの優しさである。

だが、それでも起きない人物には当然次男坊が愛ある拷問的起こし方をしてくれるわけだ。

「水真、どいてろ」

水真は即座にその場から退いた。

紅炎の持つ魔剣が持ち主の殺気を吸い取りながら迫っていた。

「兄の命に従わないものには死あるのみ！」

「起きます！！！！」

恐るべき殺気に当てられ、黄閃は間一髪で紅炎の魔剣をかわした。

「ちっ」

「普通舌打ちするか！」

起きた早々黄閃はツツコム。

「早く着替えろ。桃姫も完全に回復した。」

宮殿に戻り次第あの馬鹿兄弟を完膚なきまで叩き潰す」

「ついに全面戦争か！ 楽しくなって来た！」

黄閃の目は爛々と輝く。

「黄兄起きたの？」

ひょっこりと桃姫が部屋に飛び込んで来た。

「桃姫！ よかった、元気になったのか」

「うん！」

桃姫はニツコリ笑った。それにとろけていく兄が四人……

「いつまでダラけてる。すぐに宮殿に戻るぞ」

とろけてるモードを一気に払拭する長兄は、細剣を腰に帯びていつも以上に凜とした空気を放つ。

「青龍兄貴、いいのか？ 色王軍だとばれるぜ？」

青龍は一介の医者 of 恰好から騎士となっていた。ただし、装飾の類は一切なくいかにも一般兵という感じではある。

「構わないさ。確かにあの女将は好きじゃないが彩ちゃんを連れていくんだ。

色王軍の人間だとぐらいは明かすべきだ」

「礼節だけは重んじるんだなあ」

黄閃は相変わらずの兄には感心するばかりだった。

「青龍兄さん、俺はあの女将に黙って彩ちゃんを連れ出した方がいい

いと思うが」

「俺もそう思う。何を言われるか分からないぜ？」

次男坊と三男坊の意見は確かに一理あることだった。

しかし、真面目な長男はそれを潔しとはしない。

「気持ちとは分かんなくてもないがそうはいかないさ。

彩ちゃんを育ててくれたことにはかわりないんだ。挨拶ぐらいするべきだろう」

その頃、彩は狐女将と言い合いになっていた。

「彩！ もう一遍言ってみな！！」

「何度でも言います！ 私は青龍様についていきます！ 闇界の領主様のもとに嫁ぎたくはございません！」

「彩！！」

容赦なく彩を打つ！

しかし、彩はこれまでにない反抗を見せた。

「私は・・・！！ 青龍様をお慕いしております！！」

だから、たとえ女将さんの命令でも聞けません！！」

「ふざけるんじゃないよ！！ あんたを育てたのはあんなどこの馬の骨かも分からない優男にやるためじゃないよ！！ それともなんだい、あの男に身を売ったのかい！

昨日はそんなに楽しんだというのかい！ この淫乱娘が！！」

「それまでにしてくださいませんか？ 女将さん」

やんわりとした物腰で紅炎は諫める。だが、弟達から見れば恐怖

の魔王以外の何者でもなかった。

「あんたかい！ 彩を慰めものに使ったのは！」

「女将さん！ やめてください！ 青龍様は！！！」

しかし、そこで彩の言葉は遮られる。

「私は色王軍のものです。彩さんを私達と同行させていただきたくお願いに上がりました」

一般市民に頭を下げる王などそういるものではない。

だが、礼節を重んじるからこそ青龍は頭を下げた。

「お断りだよ！ それより彩を犯したんだ！ 金を払いな！！！」

「女将さん！！ 私に犯されてなどおりません！！！」

「あんたは引っ込んでな！！！」

狐女将は彩を突き飛ばしたのが最後だった。紅炎が彩を支え、もう反撃を始めるのである。

「彩姉様、お怪我はありませんでしたか？」

「紅炎様……？？」

参謀長官は不気味に笑った。

第三十話：塩の切れ目は縁の切れ目

Colorful 次男坊紅炎。別名地獄の魔王、冷徹非道の参謀長官……

「さあ、彩姉様、こんな場所にあなたのような御身分の方がいらっしやってはなりません。

早く家に帰ってゆっくりいたしましょう」

明らかにそれは上の者に対する言葉。そして紅炎の意図を察した水真も続く。

「兄上のおっしゃるとおりだ。

姉上、父上達が待っております。一時休まれた後、謁見の準備をさせますので」

言葉がさらに丁寧になる。

それに狐女将は多少たじろいだ。

「あんた達、一体何を」

「どこの馬の骨とも分からない者の戯言などお気にせず」

紅炎はさらに勝ち気な笑みを浮かべた。

「彩、この方達は一体どこの貴族だい？

貴族なら多少の関わりぐらいは構わないからさ」

ニヤリと笑う顔がいやらしい。

しかし、不快感を表さず紅炎は答えた。

「何、貴族なんかではありませんよ」

「だったら今までの喋り方は一体何なんだい？」

「まあ、普段の私達の言葉ではありません」

あくまでも勝ち気な態度を紅炎は崩さない。隙を見せるには少し早い。

「……そうかい、だったら私も連れていきなさい。彩の母親としてね」

「断る」

青龍が口を開いた。

「兄さん」

「紅炎、お前に任せてるとこの女将が人格崩壊を起こす。

女将、彩は俺の嫁として同行させます。

結納金はこれだけあれば失礼には当たらない」

それは破格とまではいかなくとも、充分だった。

「冗談じゃないよ!! 闇界の領主様に比べたらこんな端金で彩をやれるもんか!! さあ、早く宿代だけ置いて出て行きな!! さもなくばあんた達をこの場で亡き者にしてやる!!」

「女将さん!!」

怒りのあまり狐女将は青龍に塩を投げ付けた。

それに弟達は怒りを覚えたが青龍がそれを制する。

「……仕方ない、縁を切られたならあなたを連れていくことは出来ない。

申し遅れたが私は性を色、名を青龍、現・色王軍の大將を張っております。

後に彩には天界の王妃となって頂くために宮殿に上がってもらおうと思っております。

ですが、あなたは私が気に入らないようだ。なので彩は力付くで連れていきます」

青龍はさっと彩を引き寄せ、出口へと歩み出す。それに弟達も続くが、狐女將は青くなって呼び止めた。

「色王軍の王子様とは知らず数々の無礼をお許しくださいまし！どうか、私も一緒に連れて行ってくださいませ！」

狐女將は縋るように懇願するが、紅炎の前では無駄だった。

「土下座しても無駄だ。兄は寛大だから塩をかけられても怒りはしないさ。

だが！色王軍の大將に危害を及すものに弟達は容赦しない。端金は渡したんだ。それだけもらえただけでも有り難いと思え。

兄が命令しなければお前の存在すらこの世から消していたんだからな」

紅炎は絶望的な言葉だけ残して宿から出ていった。

「紅兄！早く！」

桃姫が笑顔を向けると殺気は一気に消える。その変わり身に自分でも苦笑してしまうが紅炎は答える。

「すぐにいく」

第三十一話：帰還

「お帰りなさいませ」

仰々しい出迎えがColorfuls達を待っていた。

それがけっして嫌いではないし、むしろ後宮の女達に囲まれるより断然良い。

だが、豪華な宮殿だということだけでもパニックになりそうなのに、

この百人以上の仰々しい出迎えに、青龍の腕を掴みながらでなければ歩けないものが一名いた。彩である。

「彩ちゃん、大丈夫かい？」

「ええ、驚いてはいますけど」

とてもそうには見えないと心の中で突っ込む弟達は、

これから彩を待ち受ける様々な事にフォローを入れてやろうと心から思った。

「お帰りなさいませ、皇子様方、そして彩様」

大臣が丁寧に彩に頭を下げると、彩も深々と頭を下げた。

それに苦笑する次男と三男坊は、

「彩ちゃん、彩ちゃんは青龍兄さんの嫁になるんだろう？」

頭を下げるのは自分が謝るときだけで良いんだよ」

「そうだな、青兄さん、結婚式はいつになるんだ？」

楽しそうな弟達の問いに青龍は真っ赤になって、

「コラ！ 人をからかうもんじゃない！」

嫁にするといったのは勢いだと言っただろう！」

「まんざらでもないだろう？」

それに兄貴がそんな調子じゃ彩ちゃんも梅香と同じ目に遭わされるかもしれないだぞ。

そんなことになったらたとえ兄貴でも俺はぶん殴るからな！」

青龍が梅香を自分と桃姫の侍女にした理由はそこにある。

もとは後宮の身分の高い姫の侍女だったが、

桃姫が気に入ってしまった、さらには水真の嫁に考えているとC O r f u l e s の父親が後先考えずに口にしてしまったため、

梅香は後宮の女達から睨まれることになってしまったのだ。

「分かってるさ。それより、梅香はどうしてる？」

「梅香は時芽隊長が占拠しております。」

王妃様もご一緒されていらっしやいますが……」

それを聞いて消えるのが次男と三男。

彼女達を諫めるのは彼等しかない。

「あの、私はこれからどのようにすれば……」

「ああ、とりあえず入浴しておいで。桃姫、彩ちゃんをお風呂に連れていきなさい」

「はい！」

ニツコリ笑って桃姫は彩を引っ張って駆け出した。

「お前達もさっさと入ってこい。大臣、父はどこにいる？」

「天宮にいらっしやいます」

それを聞いて青龍は渋い顔になった。

一方、梅香は時芽に引っ張られるようにして走っていた。

「あの、時芽様、私は桃姫様の湯浴みの準備に」

「あなたは混浴。桃姫様のお世話は私の隊のくのいちに任せてるから桃姫様も懷いてくれるわ。」

それより水真様の背中を流すこと」

それを聞いて梅香は真っ赤になった。

だが、彼女にとっての助けは来たのである。

「時芽、母さんの命令を聞かなくてもいいから梅香を解放してやれ」
「紅炎様、お帰りなさいませ」

片膝立ちになり時芽は深々と頭を下げた。

「梅香、ただいま」

「お帰りなさいませ、水真様」

梅香は涙を浮かべながら深々と頭を下げる。無事に帰って来てくれたことに安堵した。

「それより梅香、母さんがまた無茶を言ったんだってな。すまない」
「いえ、私も・・・その」

梅香は真っ赤になって答えられなくなった。しかし、その沈黙を紅炎は簡単に破る。多少のいたずらを込めて・・・

「水真、梅香に自分の身の回りのことを今のうちに頼んでおけ。彩ちゃんにしばらく梅香を取られる可能性は高いぞ」

それだけ言い残して紅炎は時芽を従えてその場から去っていった。

「まったく、紅兄貴まで梅香を使うなってんだ。梅香、湯浴みの支度だけ頼む。

そのあとは俺の部屋で待っててくれ。旅の話を聞かせたいんだ」

無邪気に笑うのは梅香の前だけということに彼女は知らない。

「かしこまりました」

優しい笑みを梅香は浮かべた。

第三十二話…エステフルコース

風呂とは小さなものと、誰かに体を洗われることもないと、ましてやエステのフルコースを施れるなど彩の辞書にはない。

「さあ彩様、次は爪と髪のお手入れをいたしましょう」

「はい……」

先程から体験したことのないものばかり彼女の世界を取り巻いている。

まさに夢のお姫様に彼女は仕上げられていつてるのだ。

「彩様にはどんなネイルを施そうかしら……」

「ヘアメイクも青龍様を悩殺するものにしないと」

「あら、だったらドレスも少し胸元が開いたものにしましょうか？」

「香水も今作らせているわよ」

「だけど、アクセサリーは間に合うかしら」

お姫様とはここまで至れり尽くせりかと言われると確かにその通りだと皆が答える。

だが、色王軍は民を苦しめるような政治を認めてはいない。

彩に施しているのも民が豊かな生活を送れるぐらいの贅沢にもならない贅沢だ。

「彩様、彩様は青龍様のお話をまだ紅炎様方からお聞きなさってはいらっしゃらないのでしょうか？」

爪の手入れを担当していただくのいちが柔らかな物腰で尋ねる。

「はい・・・」

確かに、出会ってまだ数日。青龍のことはよく知らない。

「では、お話しておきましょう。彩様はまだ後宮の妃達に会われてないでしょう？」

「ええ、紅炎様から出来るだけ関わらないようにと伺っておりますが」

「懸命なご判断です」

くのいちも当然のように答えた。

「後宮に入れられたもの、また侍女として仕えるもの、そして私達くのいち、女の園を大きく分けるとその三つになります。」

ですが、この宮殿は色王軍の権力を手に入れようとする女達が多いのも事実です。

そのために青龍様方の寵愛を受けようとこのくのいちの部隊を除けば女達は潰し合いをしております」

話がどんどん複雑になっていく。しかし、彩は耳を傾けていた。

「その中で現在、梅香という侍女がおりますが彼女が受けた仕打ちには恐ろしいものでした」

「仕打ちでございますか？」

「はい、彼女を丸裸にし敵軍の兵士達に売り飛ばしたのです！」

彩は真っ青になった。そんなことをされて彼女が受ける仕打ちなど火を見るより明らか。

「ですが、青龍様は彼女に対しては動かれたのです。」

桃姫様が気に入られた侍女、つまり心を許したものに対しては全力で助け出す、青龍様はそんな熱い部分も持っておいんです」

彩はホッとした。そして、やはり青龍はとても優しい人物だと再度認識する。

「彩ちゃん、梅ちゃんはすごくキラキラしてるんだよ！

彩ちゃんと同じくらい桃姫は梅ちゃん大好きなの！

あとね、時芽ちゃんもすごく綺麗なんだよ！　くのいちさんの隊長なんだよ！」

彩と同じように桃姫にもエステフルコースが施されていく。

桃姫が触れられることを拒まないのも、それだけ時芽率いるくのいち部隊を信用しているからだ。

「梅香様に時芽様・・・早くお会いしてみたい」

彩は二人に会えるのを心待ちにしているのだった。

第三十三話：水真の休息

彩達がエステフルコースを施されている頃、水稀は風呂からさつと上がり、自室へと急いだ。

梅香を占拠出来るのもこの時間のみだ。

「梅香、待たせた」

「水真様、どうぞ、香草茶をお入れしておきました」

梅香はふんわりと笑う。

その笑顔に水真は少し鼓動が速くなるが、顔には全くでない。

「ありがとう。それより梅香、今回の旅はな・・・」

水真は自分が見てきたことをゆっくりと梅香に話始めた。

黄閃のやんちゃぶり、紅炎の腹黒さ、そして青龍が彩を大切に思っていること。

「まあ、青龍様のお妃様になられるのですか？」

「ああ、彩ちゃんは凄く綺麗だからさ、絶対堅物の青兄さんがぞっこんになるよ。いや、すでにデレデレになってるか」

水真は笑った。それに梅香もつられるように笑う。

「だからさ、これから梅香は彩ちゃんの助けにもなってほしいんだ。後宮の後達が絶対うるさいに決まってるしさ」

侍女である自分でさえひどい仕打ちを受けたからこそその辛さが分かる。

あのようなことなど彩には受けてほしくはない。

「だけどさ、梅香が盾にはならないでくれ。梅香がまた辛い目にあつたら、俺もきついからさ」

「水真様……もったいないお言葉です」

潤んだ瞳に手を伸ばした瞬間、やはり邪魔ものは現れた。

「水真兄貴！ 飯食いに行こうぜ！」

「梅ちゃんもいこう！」

邪魔者の名前。それは兄弟！

「水真君、そろそろ梅香を返しなさい。

紅兄さんは君に間違いを犯してもらいたくないぞ」

紅炎は悪戯っ子のような笑みを浮かべた。やはり黄閃の兄だけはある。

「紅兄さんじゃないから心配するな」

やはり紅炎の弟である。

売り言葉に買い言葉はおてのものだ。

「黄閃兄さん、間違いつて何？」

「そりゃ決まってるさ。水真兄貴が！！」

強烈な蹴りが同時に二つ入る。一つは脳天踵落しだ。

「緑翔、馬鹿な兄貴の言おうとしてることなどに耳を貸すな」

「黄閃、青龍兄さんにばれたら殺されるぞ？」

明らかに今回は上二人の性であるが、責任転嫁など上二人はお茶の子さいさいである。

「横暴反対だ！」

黄閃はボソリと呟く。いつもならここで冷徹非道の次男坊からさらなる仕打ちがあるが、さすがに責任転嫁のために本日は無し。

「では、私はそろそろ桃姫様の元へ」

「梅香様、それには及びません」

どこから現れたのか時芽は忍装束を来て梅香の後ろに立っていた。

「梅香様も本日は水真様の婚約者としてパーティーへ出ていただきます」

「えっ!?!」

「なっ!?!」

当事者二人は言葉にならない驚き様を見せた。

「天空王が開催なさるパーティーです。天界の国々はおろか、招かれざる者達までやってきますのでどうかご了承を」

紅炎は厳しい目つきになった。

第三十四話…女事情色々

侍女、それは王子様との恋などご法度。ましてや婚約者など天変地異でも起こる前触れである。

「申し訳ありません、梅香様。

メイクの御順番が遅くなりました」

「そんな！ 私などがこのようなことをしていただけるなんて」

梅香はひどく恐縮していた。

時芽に水真の婚約者としてパーティーに参加するように言われた後、

天空妃直属の侍女達が梅香を風呂場へと連れ去ってしまい、メイクを施されるまでにいたったのである。

「ふふっ、梅香様、梅香様は水真様の婚約者でございますよ。

私達は今宵梅香様の侍女。梅香様に御不自由がないようにと光姫から言い付けられております。

姫様に、いえ天空妃の言い付けを守らなければ私達もお咎めを受けますので何卒ご了承を」

水真達の母親に当たる光姫こと天空妃は、普段おしとやかながらも芯の強い妃だ。

こうと決めたら絶対動きはしない。

「ですが、他の侍女や後宮の御妃様は黙ってはいないはずで」

「そのために私達がいます。大丈夫です。梅香様は私達がお守り致します」

天空妃の侍女は片膝立ちになって頭を下げた。その動作で彼女達の正体は定かになった。

天空妃の侍女達ももとはくのいちだったり色王軍に身をおいていたものまでいる。

だからこそ通常の侍女達と違って天空妃の信頼が厚く、梅香を守るように配慮も行き届いている。

「梅香様、失礼いたします」

「時芽様…」

忍装束を身に纏った時芽は颯爽と部屋に入って来た。

「時芽隊長、紅炎様の御傍になくてよろしいのですか？」

「平気ですよ。紅炎様は他国のお姫様にだって靡かない方です。」

それに梅香様を気遣うよう命じられています。間違いなく今日の標的は彩様と梅香様ですから」

それだけ話せば梅香付きの侍女は理解した。

「なるほど。まあ、彩様には少なくとも天空王直属の部隊が護衛に回りそうですものね。」

だけど梅香様には私達以外信用に置けるものがないというわけですか」

「ええ。桃姫様に紅炎様は付き添うでしょうし、黄閃様や緑翔様は他国のお姫様が付き纏うことでしょうか？」

時芽のいうとおりだった。何もColorfulを狙う女は聖界内だけではない。

当然他国にも繋がりを求める女達はあるわけだ。

梅香付きの侍女は梅香のメイクを進めながらも溜息をつかずには

いられなかった。

「いい加減それもうんざりして来た天空王は繋がりを切りたいのでしょうね。」

だから梅香様まで担ぎ出すことにしたわけですか？」

「ええ、おそらくは」

「全く、あのお方も少しはなんとかならないかしら」

侍女のいうことはもつともである。

しかし、時芽は天空王の性格を熟知していた。

「仕方ないでしょう。なんせこの聖界の主なんですから」

これだけで説明は付くのだから仕方がない。

「ところで、今回は天界の玉帝が出席なさるって聞いておりますが」「ええ、彩様を一目見たいとおっしゃってくださいまして、パーティーに出席なさるそうです」

玉帝、天下を統べる天下一の権力者である。つまり聖界の天空王よりさらに上に位置する皇帝だ。

「それと闇界の領主もいらっしゃるそうですから、一悶着ありそうですよ」

時芽は微笑を浮かべた。

第三十四話：女事情色々（後書き）

こちらの原稿アップするのすっかり忘れてました！
読む人いるのかしら…

第三十五話：毒舌パーティー

「紅炎皇子、今宵は私をお供にさせていただきますか？」

誰も見惚れるほどの美しきくのいち部隊の隊長は、ワイン色の細身のドレスを着こなしていた。

ただし、かなり動きを重視してか足の両サイドに深いスリットが入っている。

「時芽、俺は梅香の守りに付けといたはずだが」

「必要ございません」

時芽の視線の先には、いかにも初々しさ全開の恋人達がいた。

水真は片時も梅香を離す気がなさそうだ。

「だったら彩ちゃんの…もっと必要ないか…」

「はい、さようでございます」

時芽はニツコリ微笑んだ。青龍がいて彩に危害が及ぶはずがない。だとすれば、もはや時芽の居場所の一つだ。

「時芽、エスコートしてやるからついてこい」

「かしこまりました、紅炎様」

時芽はすつと紅炎の腕をとった。

「なによ！ あの女ども！」

「紅炎様と水真様があんな女相手にするわけがないわ！」

「だけど紅炎様はくのいちの時芽隊長をエスコートしてるけど」

「じゃあ、あのあの子はくのいち？」

「いえ、天空王が水真様新しい娘だと触れ回ってるわ」

パーティーに出席している女達は口々に時芽と梅香の噂をしていた。

だが、水真はぐっと自分の傍に梅香を引き寄せる。

「梅香、気にしないでいい。お前は俺の婚約者として振る舞え。だから絶対俺の傍からはなれるな」

「水真様……」

梅香にとってこの上ない幸せだった。

夢のような幸せとはこの事なんだろう。

「それより飯にしよう。何が食いたい？」

「いえ、私が王族」

「だから梅香も王族の婚約者なんだから食って良いんだよ。とりあえず前菜辺りからいっとくか？」

水真は笑った。それに梅香は顔を赤らめる。

侍女の食事は質素なもので、ご飯にみそ汁に漬物が定番である。

しかし、聖界の豊かさとは恐ろしいもので、さらに魚や肉にサラダ、おまけにデザートまでつく。

梅香は特に目の敵にされているためあまりちゃんとした食事が摂れていなかったが、

それでも水真が自作の手料理をよく食べさせていたため彼女の体はもっているわけである。

「……水真様、そちらの女性はどこの国のお姫様？ それともくのい

ち部隊の隊員ですか？」

仙界の一国の姫が水真に近づいて来た。だが、水真は素っ気なく返答する。

「答えるつもりはない。ただ一言だけ言っておくなら俺の大事な婚約者だ。

一年後に妻として迎える手筈になっている。いや、紅炎兄上が時芽隊長と結婚するのを待つべきだから一年と少しか」

水真は軽笑した。あくまでも兄優先である。

「あら、たかが侍女を迎えるのですか？」

矛先が梅香に飛ぶ。それが間違いだった。敵と見なしたものに対して水真にブレーキはないのだ。

「心配いらないさ。上の兄が勝手に恋愛しても下が必要な国の相手と結婚してくれる。

緑翔はすでに他国の姫と交流しているぐらいだ」

黄閃の名前をあえて水真は出さなかった。なんせ黄閃は色恋より食事である。まず説得力はない。

「聖界の色王軍も孤立してしまうかもしれませんね。天空王は何をお考えなのでしょうか」

「要らない国との交流は断ち切る事しか頭にはないですよ。ああ見えても父上は有能な医者ですから」

「仙界を馬鹿にしていますの？」

「とんでもない。仙界には母の親友、七海王妃がいらっしゃる世界

だ。

青龍兄上の妃となる彩姉様も七海王妃が後ろ盾になってくださる。俺達兄弟は七海王妃が大好きですからどんな事があっても力を貸してくださいませよ」

仙界の七海王妃と言えば誰もが頭を下げるほどの王家である。

仙界の統治者でなくともその影響力は計り知れない。

「…失礼致しますわ」

仙界の姫は気分を害してその場から離れていった。

「水真、あそこまで追い詰めてどうする」

「…紅兄さん、残念そうな顔するなよ。俺は兄さんほど腹黒くないからな」

紅炎は笑った。だが、もう少しぐらい相手を叩きたかったと残念に思いながら…

第三十六話：將軍達

聖界一の堅物が一人の姫に見惚れている。それだけ彩は美しく飾られていた。もちろんその青龍の反応に天空妃の側近達はガッツポーズをとっていた。

「あの、青龍様…私は変でしょうか」

向けられる真っすぐな視線に彩は思わず尋ねる。言われて青龍ははっとした。

「いや、すごく綺麗だよ。さあ、お手をどうぞ彩姫」

「…はい」

俯いて彩は青龍の手に触れた。そして会場は大きなどよめきが起こる。今まで女性をエスコートすることがなかった青龍が彩を連れて現れたのだから。

「あの、青龍様…」

「気にしないでいいよ。気楽には難しいかもしれないけど挨拶さえ済ませたら問題ないから」

青龍は彩を連れて將軍達の前に立った。

「お久しぶりです、先輩方」

「これは青龍太子、ご機嫌麗しく」

「やめてください、いくらパーティーの席でも俺は後輩なんですから」

「全くだな！」

將軍達は笑った。彩はもっと他国の后や重臣達に挨拶廻りに行くかと思っていたので少し心が和む。

「それで、その姫様が堅物の青龍様を射止めた彩ちゃん？」

彩は青龍の後ろにさっと隠れる。

「やめろ、お前が絡むとお姫様に悪影響が及ぶ。彩姫様、まずこの馬鹿は雲海、そして隣の優男は泰山、こっちの筋肉が秋風、俺は軍師の宝泉と言います。」

青龍太子が彩姫様を命懸けで守ると思いますが、俺達は必ず彩姫様をお守り致しますので」

四人は片膝達になり頭を下げて挨拶した。軍に身を置くものの礼儀だ。

「ありがとうございます…」

彩は恭しく挨拶した。しかし、それが終わればいきなり喧騒になる。

「おい、宝泉！ 誰が馬鹿だって？」

「お前以外に誰がいる」

「俺も筋肉だけみたいない言い方だよな」

「兵法のイロハを覚えて意見しろ」

「すみません、彩姫、あの三人は昔からあんな調子で…」

売り言葉に買い言葉。將軍達の喧嘩は非常に子供じみたことだった。

「泰山先輩がまともでよかったですよ…じゃないと黄閃のストップパ
ーが務まらない」

それを聞いて彩は少し驚く。黄閃のような少年が戦に出ているの
だから…

「あの、青龍様…」

「ああ、黄閃は先陣部隊だからな。電光石火の動きはあいつの一番
得意とするところだね。泰山先輩は先陣部隊の副将軍に当たるんだ」
「ちなみに雲海は砲撃部隊に、秋風は補給部隊、宝泉は本隊に所属
しています。あれで全員重臣なんで色王軍も苦勞してそうですが…」
「何をおっしゃってるんですか、先輩方のおかげで色王軍は成り立
ってるんですよ。じゃないと家の弟達はやり過ぎるからなあ」

青龍は笑った。しかし、彩の表情が優れないものになる。

「大丈夫ですよ姫様！ 俺達が必ず聖界を守ります。勿論大将を死
なせたりはしません」

「雲海、彩姫様は青龍様のみだけじゃなく弟君達の心配もしてるん
だ！ 姫様、この秋風は水真様に御遣えしております。水真様には
火の粉一つも浴びせはしません」

「その前に私が敵を返り討ちにしますから」

「紅炎様には及ばないだろ」

言いたい放題の將軍達を見て彩は穏やかな笑みを浮かべた。聖界
は大丈夫だ。

「…こりゃ青龍も惚れるわ」

「全くだな」

將軍達は爆笑した。その穏やかな時間の中、騒ぎは起こるのだ。

「…おいでなすった」

「ああ、闇界の領主一族だ」

青龍は彩をぐつと自分に引き寄せた。

第三十七話：青龍キレる！

闇界の領主一族は堂々とした態度でパーティー会場に入ってきた。Colorful esと同じ六人兄弟で末っ子だけが女の子である。とはいえども、末っ子の歳は水真と同じぐらいだが：

「青龍、俺達がついててやろうか？」

「心配いりません、先輩」

紅炎が時芽を連れて現れた。

「俺と時芽が付いてればあの程度の馬鹿一族など軽くあしらってやりますよ」

紅炎の笑みに恐ろしいほどの悪寒を感じた將軍達は一礼して少し離れた。紅炎は怒らせたら怖い：怖いのだ：

「紅炎、あまりやりすぎるなよ」

「相手次第だな、兄上」

そういいながらも、間違いなく紅炎は相手を地獄の底まで落とす気は満々だった。止めたところで止まる弟ではないことは青龍は承知しているが：

そして闇界の領主一族は青龍に近づいて来た。

「：お久しぶりです、闇界の領主殿と御兄弟の皆様」

「これはこれは博学なる青龍皇子」

青龍が闇界の領主一族と挨拶を交わし始めると紅炎と時芽は後ろ

に控えた。

次期聖界の主を愚弄するものなら、間違いなく紅炎は徹底的に相手を葬り去るつもりだ。

「そちらの女性は我が里の彩殿かと思われませんが、間違いないかな？」

「ええ、人買いの里から私の婚約者として連れて参りました」

青龍はわざとそう答えた。ちなみに人買いの里は正式な名前ではない。しかし、そう言った方が相手に伝わるのである。

「ほう、女性に興味がないと噂される青龍皇子もただの助平だというわけか」

「兄上に向かって何を！」

「紅炎！ここで騒ぎを起こすんじゃない！今日は玉帝がいらっしゃるといふのに争いの火種を付けるような愚かな言動は慎むんだ」

おもいつきり皮肉である。さすがの青龍も助平呼ばわりはキレるらしい。

「失礼しました。彩をそちらから奪う形となりましたのでお詫び申し上げたいところですが、今我々の世界は戦時中。

この争いが止めば改めて闇城に行かせていただきます。出来れば早い方がいいのですが、私は領主殿のおっしゃるとおり助平ではありませんから」

穏やかな笑みを浮かべて青龍は皮肉を重ねた。早くしなければ子供の一人や二人出来ると言っているわけである。

「おい、さっきから黙って聞いてれば！」

闇界の領主の次男が躍りかかろうとしたが、

「おやめください。Colorfulに手を出すものを殺めずにすむほど私は甘くはありません。

何より私の主は好戦的な性格をしておいでですのでどうか怒りをお鎮め下さい」

時芽が領主の次男の後ろに立ち、すっとくなく背中当たった。

そこでいつもなら一騒動起こるのだが何故か今日は領主は事を荒立てない。一息ついて領主は話始めた。

「…それより、君達にいい知らせがあつてね」

「お聞き致しましょう」

「我が娘、綾姫は玉帝の御子息からの御寵愛を承る事になってね、近々式を挙げる事になったんだよ」

「それはおめでとうございます。天界の主である玉帝もさぞお喜びでしょう」

青龍は間髪入れずに祝辞を述べる。青龍と紅炎は心底喜んでいた。彼女は二人に取り入ろうと必死だったため、ようやくそれから解放されるわけである。

「ああ、いつか綾姫は天下の全てを手に入れる立場になる。つまり君達の上に立つというわけだ。いくら聖界の色王といえども、天界の中で突出した一独立国に過ぎん。

さすがに君達の祖母が玉帝の叔母にあたろうとも御子息の代になれば関係は薄れていくだろうな」

聖界が力を誇示できるのはバックに玉帝の一族がいるからとでも

言いたいのだろう。しかし、聖界は一独立した世界として君臨している。天界の玉帝一族との関係は大切にしている。戦争で負けることはない。

「領主殿、先程から我が聖界に何をおっしゃりたいのですか？」

紅炎が尋ねると領主の長男が品なく言い始めた。

「はつきり言ってやろうか？ お前達は没落していくんだよ！」

兄弟は自分達が優位にいたいと思いきり爆笑した！ そしてさらに続ける。

「彩、そいつに飽きたら妾として迎えてやるよ！ まっ、今からでも構わないがな」

「貴様！！」

「待て！！ 紅炎！！」

紅炎が剣を抜こうとしたのと時芽が動くのを青龍は一喝した。覇気が会場を埋め尽くす。

「私の婚約者を愚弄しないでいただくか。戦争に私情をはさみたくはないんでね。」

むろん、これ以上次期聖界の天空妃を愚弄したとなれば色王軍は全戦力をあげて闇界を潰す用意をさせてもらう！」

青龍はキレた。

第三十八話…玉帝

会場がざわつき始める。戦争している世界の総大将を怒らせたのだ。いつ血の雨が降ってもおかしくないほど辺りは緊迫していたが、それを沈める人物が現れた。

「穏やかではないな、青龍皇子」

「玉帝…」

多くの側近を引き連れて玉帝は現れた。中には格の高い女神までがいるのだから天界という世界はすべてのものの憧れである。

「冷静沈着な青龍皇子も婚約者には弱いと見える。だが、君が熱くなるのもわかる。美し過ぎる姫だ」

彩を見て玉帝は微笑んだ。

「さて、この喧騒を鎮めなくてはならないが、私も聖界がこれから弱体化していく未来を見ているよ。

力あるものはいつかは滅んでいくのが世の中の常ではあるが…」

「滅ぼしたりはしませんよ、玉帝」

天空王が玉帝の前に出た途端、玉帝の側近達は頭を垂れた。それが閻界の領主一族にとっては非常におもしろくなかった。

「久しぶりだな、天空王、光姫」

「お久しぶりです、皆様」

光姫はドレスの襷を持ち上げて挨拶した。

「青龍、下がれ。私も闇界の領主殿に挨拶しておこう」
「畏まりました」

青龍は天空王の後ろに控えた。いつ何が起こるか分からないからだ。

「久しぶりだな、闇の大王」

「貴様！ 父上を愚弄するつもりか！」

「したぞ？ 聞いて分かるだろう？」

場内から爆笑が起こった。天空王は非常におちやめだと評判である。

「今すぐ亡きものに！」

くのいち達が領主一族の喉元にくないを突き付けた。

「ここは私の城だ。こんなところで戦いを挑むものは愚かだと言っている。それに玉帝の御前、騒ぎは控えろ」

闇界の領主一族は身動きが取れなくなった。完全に天空王に嵌められたのである。

「さらに上に立つもの、自分が馬鹿にされたという理由だけで戦争を始めるものではない。血を流すのは自分ではなく民だということを忘れるな」

完全に天空王は優位に立っていた。それに感心したように玉帝は手を叩く。

「さすがは天空王か。見事な御高説だ」

だがここで天空王の話は終わらなかった。

「貴方にも言ってるのですよ玉帝。最近の天界は貧しき者を出している」と聞く。その者達が聖界に逃げ込んでくるのはどういうことですか？」

会場がざわつき始める。天界は裕福な世界として有名であるが故に全てのものが憧れるのだ。それこそ貧しいという言葉など皆無というほどに。

天空王の質問に玉帝は目を伏せて静かに答えた。

「世界には必ず流れがあるのだ、天空王」

「それで聖界は滅びるということですか？」

それとも闇界の綾姫をあの特徴的な御子息の妃に迎えて闇界と手を組み、聖界と戦争をするからですか？」

全てのものが玉帝の言葉を待っていた。そして玉帝は答えた。

「さあ、闇界の領主よ、ともに酒を酌み交わそう。聖界を滅ぼす宴が始まる」

聖界が大戦乱に巻き込まれようとしていた…

第三十九話：優秀な部下

パーティーが終わった後、Colorfulsは桃姫を除く全員が、以下聖界の重臣達が会議室に集っていた。

その中で一番感情をあらわにしていたのが天空妃こと光姫だった。

「玉帝はいかがなさったのですか！」

「落ち着きなさい光姫、いくら天界と闇界が手を組んで聖界を滅ぼそうとしてもそう簡単にはいかないよ。」

少なくともこの騒動で仙界の女神達は中立を保ってくれるそうだしね」

「確かに七海がそう言ってるから仙界は中立で間違いないけど玉帝の変わり様はあんまりだわ！ 戦争を好むような人じゃなかったのに…」

言うだけ言えば光姫は落ち着く。しかし、今回の件で腹腸がどす黒く煮え繰り返っている紅炎は笑顔で言っただけだ。

「母上、何なら天界丸ごと色王のものにしてしましましょうか？」

「必要なら闇界にも」

「紅炎、冗談はよせ」

青龍は諫める。おそらく本気になれば天下統一などこの一族は出来る実力がある。

「失礼、ですが兄上、我が隊はすでに士気は上昇傾向にあります。

後は兄上が一言戦えといえど弟達は拒みはしません」

「青龍兄上、紅炎兄上のおっしゃるとおりだ。水真軍は補給線も整えさせた。いつ戦争になっても問題はない」

紅炎と水真は勝利するための準備は整えていた。聖界に害なすものなどに払う礼儀はない。

「お前達は走りすぎだ。玉帝は母上のおっしやるとおり戦いを好まれる方じゃない。

それに御子息と綾姫の結婚もなにかの間違いじゃないかと思える」
「確かに。あの綾姫は美人には違いないけど性格最悪だしな」

黄閃が言うことはもつともだった。そして青龍は天空王に申し出る。

「父上、少し考える時間を頂きたい。やはり真意掴めぬままに戦いを始めるわけにはいかない」

「いいだろう。だが全軍覚悟は決めておけ。敵は聖界と仙界以外全てに及ぶ可能性がある。猶予は向こうの申し出で三日、それまでに玉帝と閻界に下るか、戦い勝利するかその二つしか選択肢はないからな」

その日の会議は終了した。その会議の後、紅炎は青龍に告げた。

「兄さん、俺は兄さんになら天界を統べる力があると思う。だから戦うことを軍師としては勧めるが、兄さんが平穩を求めるなら Corfulles はそれに従うからな」

「…そうか。まっ、お前が大人しく従うとは思えないがな」

「当たり前だ。玉帝はともかく、あんな馬鹿一族の下に付くことだけは勘弁だ」

そう告げて紅炎は後ろを振り返る。

「時芽、くのいち部隊は好きな方を選べと伝えろ。相手が相手だからな、捕虜となれば屈辱は男の比じゃないぞ」

「そうおっしゃると思いますが既に全員が地界へ調査に出ています。どうやら今回はそっちにも原因がありそうですし」

時芽は簡潔に答えた。それを聞いて二人は苦笑する。

「さすがはくのいちの隊長だな。行動が早いだけじゃなく主人の期待は裏切らない」

「当たり前です。幼い頃からのお付き合いなんですからね」

時芽は美しく笑った。まいったと言わんばかりに紅炎は時芽に近づき告げる。

「時芽、付いてこい」

「畏まりました、我が主」

紅炎は時芽を連れて自分の部屋に戻っていく。おそらく軍略を立てる手伝いをさせられるのだろう。

「いい部下を持ったものだな」

青龍は愛しきものの待つ部屋へと歩き出した。

第四十話：月

月がいつも以上に綺麗だった。妖しい光に包まれた後宮の一室に彩は部屋を宛がわれていた。

青龍の婚約者といえども、正式な妻になるまでは宮殿で休めないのである。しかし、後宮の女達が悪さを出来ないように万全な警備はされているわけだが：

「青龍様」

「何か変わったことはないか？」

見張りの兵達に青龍は尋ねる。

「はっ！ 先程桃姫様が遊びに来られたこと以外は何もございません。桃姫様は天空妃の近衛兵がお部屋にお連れ致しました」

「そうか。ならばお前達もう休め。暫く休めなくなるからな」

「はっ！」

兵達が彩の部屋から去ると青龍は簾をくぐり部屋の中に入った。

「青龍様…！」

「彩ちゃん…失礼するよ」

青龍は穏やかな表情を彩に向けた。彩の心臓はひどく跳ね上がる。しかし、青龍の心境を察していたからこそ、彩は静かに話始めた。

「青龍様、さっき桃姫ちゃんが遊びに来て下さいました。あんなに小さいのに私に言ってくれたのです。『大丈夫、彩ちゃんは私達C

olorful esが守るからね』と。

だから私は凄く温くなりました。そして心強くなれます」

月に包まれて彩は一際美しく見える。その眩しさに青龍は少し目を細めた。

「青龍様、私は戦う術を知りません。ですが人を愛する事を知りました。青龍様にはご迷惑かもしれませんがこの思いを伝えたい…」

思いが、涙が溢れてくる。もう止まらなかった！

「私はあなたを…！」

言葉が遮られた。青龍の腕の中に彩はすっぱり収まってしまった。青龍の指に彩の髪が緩く絡む。

「彩、俺は彩を愛している。自分の心のままに戦うことが許されるなら闇界を滅ぼしてやりたい。

だが、色王軍の大將として戦わなければならないと言うなら君を含めて聖界を守るために戦いたいんだ。

勝手だと思うが俺のわがままを許してもらえないか？」

次期聖界の王として自分の感情だけでは動けない。だが、彩を思う気持ちを青龍はごまかすことが出来なかった。

ずっと探し続けてやっと出会えた女性。何度夢の中で彩を抱きしめたいと願ったんだろう。

「充分でございます…」

ハラハラと涙は落ちる。だが、彩は愛しきものの背中に腕を回し

た。

「…彩、俺が帰ったら結婚してくれ」

「はい、青龍様…」

二つの思いはやっと重なった…

時空を越える。未来へ動き出す。夢は一時閉幕を迎える…

第四十話：月（後書き）

次回から話は現代に戻りますよ！

青龍と彩の恋愛模様はもっと書きたかったんですけど、それはまた後日に書きます。

第四十一話：現代

永い夢は少しずつ醒めていく。遠い過去の出来事。だが、それは確かに近い時に自分が体験していたことだった。

「青悟さん、青悟さん、起きて！」

愛しきものの声が聞こえる。それは自分がこの現代で幼いときから聞いてきたもの。しかし、まだ青悟の頭は青龍だった。

「ん…彩」

彩の腕を掴み自分に引き寄せる。そして唇を重ねようとした瞬間！

「ちょっと青悟さん！！　ここは現代です！」

真っ赤になった彩が叫んだ。それが寝ぼけた青悟の行動を止める。

「現代…。：ゴメン！　彩ちゃん！」

ようやく青悟の頭は回転し始めた。慌てて彩の腕を離す。

「おはよう、ちょっとびっくりしたわ」

美しさは変わることがなくとも、彩姫と違って長年の親しみが二人の空間にはあった。だからこそ、彩は真っ赤になりながらも青悟のベットに腰掛けて尋ねる。

「青悟さんも前世の夢を見てたの？」

「ああ、玉帝が閻界の味方をすると言って俺は戦争するかどうかを結論づけなければならなくなって、そして君と約束して…」

彩はさらに真っ赤になった。彼女の夢の中で青悟は自分を愛してると言ってくれたのだ。目の前にいる同じ顔をした、いや青悟の前世である青龍が…

「やっと思い出したようだな青悟、いや、青龍」

「親父…」

青悟の部屋に天空王、つまり父親である須藤空が入って来た。

「親父、一体どういうことなんだ？ 俺は確かにこの現代で二十三年間生きて来た記憶はある。」

だが、青龍として生きた時間が近いものに感じてならない。何より、じいさんが言ってた異世界というのも気になるしな」

「それはそうだろう。聖界はお前が夢見ていた時間からまだ23時間しか経っていないのだから」

あっさり空は答えた。

「ちょっと待て。まるで聖界が今でも存在している上に俺達はただこの現代にいるだけみたいじゃないか」

「ああ、その通りだ。正確に言えばこの世界は『地界』だ。聖界の一時間がこっちの一年に相当するからな、お前が医者として勉強するにはもってこいの世界だろ」

空はニヤリと笑った。この世界に自分がいるのはこの男の仕業だ。

「親父、一体なんのために俺達をこの世界に転生させた…」

「簡単なことだ。だが、その前置きはしておこう。

この地界で一生を遂げ、その知識や力を持ったまま再度俺達の世界に舞い戻るシステムを闇界は作り上げた。

当然、この地界より俺達の世界は力が跳ね上がるからな、聖界より優位に立てるのではないかと闇界は確信したのだろうな」

青悟と彩は頷く。確かにそれが出来ればかなりの力は手に出来るだろう。

「ならばこちらに対抗するためにはお前達を送り込めばかなりの戦力が上がると期待した。

だが、闇界と玉帝が手を組んだことにより転生の妨害をされたんだ。その結果、お前達の聖界での記憶が少し曖昧なものになったんだ」

「なるほどな、確かに筋道だけは通ってるな。だが、証拠は？」

さすがは理数系、証拠を求めてしまう。

「そうだな、地界に降りて来ている闇界の領主一族を叩いてみたらどうだ？

まあ、倒したとしても闇界に戻るだけだがな」

「どこにいるんだ？」

「まだ見つからないから時芽達が探ってるんだろ？ とりあえず向こうはそれなりに大軍だろうからな、こちらもある程度準備はいるな…宝田泉、確かそんな名前で転生していたか、宝泉は」

青悟は一つため息をついた。結論を付けるのにその仮定達が存在していたのである。

「…まったく、先輩にいきなり聖界の話なんてしたら頭の心配され

るだろうな」

青悟は苦笑するしかなかった…

第四十二話：旅は道連れ世は情け

その日宝泉こと宝田泉は須藤邸の前にいた。彼の仕事は雑誌編集者、とはいえども、たった二人しかいない窓際族部所に所属しているわけだが：

だが、彼が書く数々の記事は青悟に感心を与えるレベルなのでフリーライターとしても活躍していた。

「編集長、須藤家の前に来てるんですけど、どうもここには帰ってきそうにないですね」

「ああ、いい読みだろうな。だが、君は青悟君の先輩に当たるんだ。必ず電話の一つは来るだろう」

「だといいですけどね…」

宝田は苦笑した。青悟が本気でかくれんぼをしたなら、常人の発想で捕まるわけではないのだから。

「じゃあ、一度失礼するよ。こちらもう少し忙しくなりそうだからね」

「はい、では失礼します」

宝田が携帯を切ったその直後だった。噂の主からかかってきたのだ。

「おいおい編集長！」

預言者の実力に感心しながら宝田は電話をとった。

「もしもし、宝田先輩」

「青悟！ お前どこにいるんだ！？ ご両親が国際指名手配された

って報道陣がお前の家に詰め掛けてるぞ！」

宝田の怒鳴り声に青悟は苦笑しながらも答えた。思っていた以上に心配をかけていたようだ。

「今、俺達は軽井沢の別荘にいます。それより先輩にお願いがあるんですけど、秋野先輩と一緒にこっちへ来ていただけませんか？」

「風馬とか？ 別に構わないが改まってどうした？」

秋風こと秋野風馬の名前が上がったことに宝田は首を傾げる。

「お話したいことがあるんです」

「彩ちゃんとの結婚報告なら聞きたいが、それ以上に深刻みたいだな」

「はい、すみません」

申し訳ない声ということは間違いなく深刻なこと。だが、やはりかわいい後輩の頼みは聞きたくなる。

「分かった。筋肉馬鹿を連れて行ってやるよ。そうだな、風馬は漁に出てなければ明日にでもそっちに着くから」

「はい、お願いします」

「おう、じゃあな」

笑って宝田は携帯を切った。そしてかばんに携帯を入れた直後だった。

「どこに行くんだって？」

ひやりと冷たいものが後頭部に当たる。

「おいおい、善良な市民に拳銃突き付けるなよ」

意外に冷静な反応だった。記者という仕事柄の性かもしれないが。

「そうはいかない。聖界の軍師宝泉、この場で始末する」
「させません」

一瞬だった。美女がたった一撃で拳銃を持った男を倒したのである。

「君は…」

「私を御忘れですか？ 宝泉軍師」

その名前を呼んだのは時芽だった。だが、いつ出会ったのか宝田は思い出せなかった。ただ、一言だけ返す。

「…会ったことはありそうだがな」

「私にとっては昨日のことなんですけどね」

時芽は苦笑した。聖界では昨日なのだから…

「どうやら青悟に関係ありそうだが」

「勘のよさはやはり変わってない御様子。須藤空様から別荘に向かう前に秋野風馬様、雲山海様、泰山晃様を拾っていくようにとの御命令です。」

彼等の居場所は知っていますね？」

雲山と名前が出た瞬間宝田はげんなりした。久しく会っていない友人に会うだけで疲れるのだ。

「またなんであいつらを…」

「必要だからです。車は私が乗って来たものをお使い下さい」

「ちょっと待て！ あんたみたいに強ければ問題ないが俺にさっきみたいなやつに勝てる力などないぞ？」

「その心配はいらないよ、宝田君」

「さ…桜井編集長！！」

そこにはワゴン車に乗って来た桜井夫妻、つまり彩の両親がやって来たのである。

いかにも準備万端という感じだ。

「うちの部所が二人しかいなくて良かったな、堂々と失踪できる」

「失踪って…一編集者をいかにも危険な道に道連れですか？」

「心配するな、君を私の部下にしたのもこの時のためだ。」

何より君は青悟君達が好きだろう？」

向けられる笑顔には敵わない。目の前にいる男はそういう人間だ。

「はいはい、付き合いますよ。編集長の怖さは身を持って知っていますからね」

旅は道連れ世は情け、まさにこの一言につきた。

第四十二話：旅は道連れ世は情け（後書き）

そろそろColorfulも人数が増えてきましたので、人物紹介をさせていただきます。

スドウ
須藤 セイゴ
青悟

現在二十三歳の須藤家長男で医者。前世は聖界の色王軍大将・青龍。

古きよき時代のお父さんのような性格をしているので、やんちゃばかりする兄弟を見事にまとめている。

二十歳でアメリカの某有名大学医学部を卒業、論文も認められるという快挙を成し遂げているが、末っ子の桃華に会いたいがため、榮譽もいらないと早々に帰国した。

彩とは互いに思いあっているのだが、なぜか発展しない仲である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6133e/>

Colorfules

2010年10月8日22時06分発行